

北鎮の おたけび





第33回 神道講演全国研修大会 北海道大会 平成29年6月20日～22日 北海道神宮

講話集

北鎮の
おたけい

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会

書名揮毫

第三十三回神道講演全國研修大會 北海道大會 顧問

吉田源彦

(北海道神社庁 庁長・北海道神宮 宮司)

【表紙写真】

北海道神宮拝殿

第三十二回

神道講演全国研修大会

北海道大会

とき 平成二十九年六月二十日～二十二日
ところ 北海道 神宮

目次

御挨拶

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会 顧問 吉田源彦

(北海道神社庁 庁長・北海道神宮 宮司)

序文

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会 会長 落合偉洲
神道講演全国協議会 会長 (久能山東照宮 宮司)

記念講演 北海道開拓の先人達

北海道神社庁 庁長 吉田源彦 1

拍手 合掌

芝幸介 18

苦しい時の神頼み

浦隆一 23

明治以前のアイヌ民族

小林晴美 27

寒中みそぎについて

西山智史 33

チャンネルを合わせる

沖縄県民斯克戦へり ―遺骨収集で思う事―

黒と白 ―神葬祭における講話―

いのり

美しき人

神様かまへ、仏様はつとくな

神仏習合

利他の心

八月十五日

滝沢正太郎 38

小野日隆 43

村井之介 48

大竹久雄 53

鈴木明子 58

吉田隆宏 63

小栗雅仁 68

山下裕嗣 73

宮崎貞臣 78

北海道百五十年を迎えて

うまし国日本の理想

国家神道は世界最強宗教だ

女性宮家創設より旧皇族の皇籍復帰を

元号を大切にしよう

北海道神宮の由緒と札幌まつり

それは十八番ホームから始まった

至誠のこころ

これが「道」でしょう

角田 秀昭 86

井出 舜 90

菅原隆志 95

石塚 智康 100

芦原高穂 106

吉良忠誠 110

河本文夫 114

村田和之 119

山本行恭 125

先祖の祭 ― 日本人の死生観

落合偉洲

131

神道講演全国協議会役員名簿

139

神道講演全国大会のあゆみ

141

あとがき

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会 実行副委員長

神道講演全国協議会 副会長

山本行恭
(樺太神社 宮司)

144

御挨拶

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会 顧問

吉田源彦

(北海道神社庁 庁長・北海道神宮 宮司)

第三十三回神道講演全国研修大会が北海道大会と銘打って、当神宮施設を会場として平成二十九年六月二十日から二十二日に亘って催行されました。

本大会にご参加の皆さまには設備の整っていない三日間は大変不自由な思いをおかけしたと存じます。

しかしながら研修に入りますと、そんな不便さもないことのように、構想を練って持ち臨んだ如く真剣かつ真摯な姿には、自分を省みて大いに反省至極でした。

私も月四度の恒例祭始め、月に六、七回は祭典後に社頭講演を行い、その他奉賛団体等の総会などでもお話を申し上げることがあり大変苦勞でもあります。

ある時は新聞から、ある時は参拝者との会話の中から題材を採り、あらゆる方面へアン

テナを張り巡らすほどまではゆきませんが、題材を儔抽斗に持つことは私にとっては大事故なことかなと思っております。お陰様で奉賛団体の代表者から「おまつりの後の宮司さんのお話を聞くのが楽しいし、為になりますから会に入りませんか。」などとお誘いして、会員が増えていることを告げりましたが、このことは、玉串を捧げてお参りされることに根本があることは申すまでもないことであります。またマスコミに関わられている方は、「日本文化の一端を知ることが出来、またお参りさせていただいて宜しいでしょうか。」といわれ有難いことでした。

私たちの社会観とは異なる方々もたくさんいらつしやるわけですから、神職という立場を理解して頂けることも、貴研修の大切な分野と解しております。

当北海道は今年明治維新百五十年、そして平成三十年を迎えることになり、天皇陛下には御即位三十年という、国民にとりましても佳年の年となります。その年に歴史ある鎌倉の鶴岡八幡宮を会場として開催されることは歴史としてはもちろんのこと、環境も素晴らしく、街全体から題材をみつけることも可能なことかもしれません。

近年の北海道は集落ごと世帯も少なくなり、神職も頑張っている姿を見ますが、他で収入を得なければならず、残念ではありますが、神社庁としても貴研修から得るものは大き

いと思ひますし、貴大会がますます盛会裡に開催され、自分をも磨く場として発展されま
すことを祈念申し上げます。

序 文

第三十三回神道講演全国研修大会 北海道大会 会長

神道講演全国協議会 会長

落 合 偉 洲

(久能山東照宮 宮司)

第三十三回神道講演全国大会は、平成二十九年六月二十日から三日間、北海道札幌市に
御鎮座の北海道神宮御神域にて開催されました。全国各地より有志一堂に会して「神のみ
こともちとして世をつくり固め成すこと」という敬神生活の綱領にも謳われている実践課
題に取り組みました。

神職として自己啓発を図るために、自分の練り上げた講和を、参加者の講和を聴きつつ、
多くの事を真剣に学んだ充実の三日間でした。

そして、それらの議録が毎回講演録として印刷出版されますが、今回の講話集『北鎮のおたけび』で二十八冊（合併号含む）となります。これらは、斯界の貴重な財産であり、多くの神職や神職を志す人々に読まれているものと確信しております。

今回は北海道神宮の御神徳を頂き、遠く北海道の大地に根を下ろし開拓に心血を注いだ先人達に思いを馳せつつ『北鎮のおたけび』と題して刊行されることになりました。

終戦後の混乱した世相を正し、我が国の本来の姿を求め学びつつ、神職の講演研修指導に御尽力を頂きました佐古幸嬰先生、石井寿夫先生を始め諸先学の御功績に敬意と感謝の意を表しつつ、更なる研鑽を誓いたいと思います。

最後になりましたが、本研修会に格別の御支援御協賛頂き、また研修会場を提供頂きました北海道神社庁長・北海道神宮宮司吉田源彦様、及び全国各地より御支援頂きました神社に対して厚く御礼申し上げます。

記念講演

北海道開拓の先人達

北海道神社庁 庁長 吉田 源彦

只今ご紹介を頂きました北海道神宮の宮司の吉田でございます。今更隠すつもりもございませんが、十三年ほど前に私は脳出血で倒れ病院にお世話になったことがあります。幸いにして妻がいち早く私を見るなり救急車を呼びまして、三十分以内にはお医者さんに見ていただけるような状態でした。大体男性は左の脳が出血しやすく、女性の方は右の脳が切れやすいそうで、交感神経の繋がりが方から男性の場合は右半身に、女性の場合は左半身に後遺作用が出やすいそうです。ですから私は右半身に後遺症が残るわけですが、後から主治医の方にお聞きしたところ九ccの出血があつたそうです。そして三ヶ月程入院していましたらお医者さんが「そろそろ退院だよ」と言うんですね。「先生そんな冷たい

こと言わずに何とかありませんか」とお話しましてもう一ヶ月入院させて頂いて、計四ヶ月入院しました。その間に大勢の皆さんがお見舞いに来てくださって、その方々や病院の方々からも今後のリハビリのことを尋ねられまして、札幌の東区にあるクラーク病院というリハビリ専門の病院があることを知りまして、主治医に紹介状を頂きました。そして脳外科の病院からリハビリの病院に転院しましてそちらで治療といいますが、リハビリをするしかないですね。頭の中っていうのは一か月で決まるそうなんです。ですから後はリハビリしかないということで、本当にリハビリだけ。薬と週に一回くらい先生が見に来る程度であとはリハビリだけの治療でありました。そこで三ヶ月経ちましたら「そろそろ退院ですよ」とまた同じことを言われましたから「先生実は前の病院で一か月伸ばしてもらったんですが」と言いましたら先生も「仕方ありませんのもう一ヶ月様子見ましょう」ということで、全部で八ヶ月入院とリハビリをしました。しかし思えば今よりリハビリをしているときの方が体の動き等、体調は良かったかなと思います。退院しましてから幸いにも職員の方が一生懸命働いてくださったお陰で宮司にさせていただき、札幌市内、道内の方々から「北海道の神社庁長をやって頂きたい」というお話もありました。私は神主しか知りませんものですから、「五十年ほど神職をやってきました、そういうことでしたらお

札の気持ちでお務めをさせていただきます」ということで庁長をやらせていただくことになったわけですが、そうすると北海道の場合には北海道のみで一ブロックですから庁長イコール神社本庁理事ということも重なってまいりまして今は何とかそのお務めを果たせているかは別として、そういったことで倒れた後からですが官司になり、神社庁長になり、本庁の理事をも務めさせていただいているというような現状でございます。

北海道も当然そうですがこの札幌の街というのは特に、佐賀県の方々が大変力を入れて開発をしてくださいました。当時明治二年の九月一日に明治天皇様より「北海道開拓にあたって本州各地から北海道に渡る人たちがたくさんいらっしゃるから、その方々の心の安寧を祈るために神々を祀れ」という詔が下されました。そして全国各地から入ってくる入植者に先立ちまして明治政府は「北海道開拓使」という役所を作ったんであります。この役所の初代長官が鍋島直正公という佐賀藩藩主、第十代の鍋島藩主であります。この方の下で藩士の島義勇という方がおいでになりました。この方は北海道神宮の境内にも、札幌市役所のロビーにも銅像がございます。この方が札幌に入ってくるわけですね。また鍋島直正公は初代の北海道開拓使の長官にはなりましたが今でいう、リュウマチのような病にかかってしまい、現地に赴任することは叶いませんでした。

その為三十四歳くらいでしたでしょうか、東久世通禧という公家の方が二代目長官として、イギリスのテールス号という船で品川から函館まで、島義勇らを連れて一行約二百人とも言われておりますが、その方たちを乗せて函館まで来ました。函館というのは当時北海道では大都會でありまして、対して石狩の札幌は原野の状態でありました。東久世通禧長官は函館に留まりまして判官島義勇公が明治天皇様からお預かりした神々、大國魂神、大那牟遲神、少彥名神、この三柱の神々を神祇官から授かり、背中に御霊を背負って石狩まで入ってくるわけでございます。その道中当時は海路の方が天気さえよければ便利ですから函館が開け、小樽が開け、宗谷が開け釧路、根室と海岸線の方が開拓は早いわけです。対して陸地は不便でありまして、十二月に島義勇は寒さに凍えながら石狩に入ってくるわけであります。島義勇が滞在したのは十二月から翌年二月までと、短い期間ではありましたが、藁長靴を履き、その下にアイヌの方々で作った鮭の皮で作った足袋の様なものを履いて、雪の中を漕いで、京都の朱雀大路を中心とした碁盤の目の様な街づくりを頭に描いて図面を残していったそうです。

そして島義勇は札幌の原野を眺め「この石狩の地こそは四通八達。北海道内どこをとつてもこの場所は最高の場所になる」というような漢詩を残しておりますが、その実現のた

めにはまず、開拓事業の資金が全くないことが問題でした。ですから島判官は函館に残っている東久世通禧長官にお金をどんな催促するわけです。「この地こそは将来においては本当に住みやすいところになるわけだからもつと開拓事業にお金を送ってくれ」と催促します。しかし長官は「お前の開拓事業にだけお金を送ることはできない」と返答をします。しかし当時、ロシアは北辺の所は雪で埋まって港にならないため南下して凍らない港を獲りたい、北海道を占領、支配していききたいとの思惑があり、そのような南下政策をとっておりしました。それを松浦武四郎という三重県の松坂に住んでいらした方が、この方も島判官と同じように開拓使の判官として務めるのですが、この方は幕末に数回北海道をはじめ樺太など探検されており、その時にロシアの南下政策というものを見聞きしておりました。そこでそういった危険があることを島義勇にも伝えておりましたから、島義勇は石狩を開拓するには、防衛上の問題もここから発していかなばなるまいと考えておりまして、東久世長官に再度資金の催促をします。長官も受理できないと再度返事を書きますが、矢継ぎ早に資金を催促するものですから、長官は明治政府に「島義勇が資金を催促してくるわけけれども、この資金はここにはないので明治政府が直接島義勇に資金を送っていたきたい」と手紙を出します。しかし明治政府も財源に余裕があるわけではない。そうし

ますと、長官も気骨のあるお方で「もしお金を出せないなら島義勇を解任させて下さい。それが叶わないなら自分が辞任します」と政府に申し出の手紙を書きます。そうなる政府は長官を首にするわけにはいかないですから、島義勇を東京に召還することになります。島義勇自身は北海道の開拓に心を残したまま帰る事になりますが、その時「他日、五州第一の都。後世においては必ずや世界でも稀な大都会になるであろう」と原野を見ながら百年二百年も先のことを漢詩に残して去るわけであります。その後「佐賀の役」「佐賀の乱」ともいいますが斬首の刑を受けて島義勇は亡くなるんであります。明治政府はその刑の失効の為に早馬を出しましたが、現地では刑の中止の使いが来ないうちに処刑を諮ったそう。で早急に刑を執行したと伝えられております。島義勇は心ならずも亡くなってしまいうんですが、日本の刑の中で斬首の刑はこれが最後だったそうであります。そういう背景もあり島義勇の恩恵である現在の発展を、開拓事業の功績を称え、昭和四十九年に島義勇の銅像を建立されまして、島義勇の命日であります四月十三日には現在では顕彰祭を齎行してあるのであります。

当時のそういった開拓に尽力された方々は、寝る場所もなく、暖房もなく掘っ立て小屋に熊笹で屋根を葺いて、その中心に穴を掘って薪や枯れ木を燃して暖をとったそうです。

それでもまだ寒いということで、犬を抱いて寝てもよろしいという文書を発令したといいます。そしてそれぞれ飼っていた犬を抱いて寝たそうです。おそらく、犬も寒かったろうとは思いますが、当時は樺太犬やアイヌ犬、現在は日本犬と言っておりますか、人の背丈位あるような大型の犬でして、毛がフサフサしているんです。そういう犬を抱いて寝てもよろしいという指令が出てはじめて犬を抱いて寝たという記録もあるんです。そういう大変厳しい中で毎日縄を張って雪の中を漕いで街づくりの区画を整備していく。ところが先に述べましたように島義勇は東京に呼び戻されてしまうわけです。そうすると責任者がいなくなるわけですから函館から東久世通禧長官が自らこの石狩に入ってくることになります。島義勇とは開拓事業の資金の問題でけんか別れの様な状態になってしまっていますが、島義勇が描いた構想が雄大で将来性のある構想が出来ている事を確認し、今度はその東久世通禧公も島義勇の構想の通りに街づくりを繋いで、続けていくんですね。これは私どもにしてみれば感動するぐらいに当時の方々は立派に開拓事業を務め、繋いで、進めていきました。そして東久世通禧は自身が東京に戻るときも次の長官に図面を託して街づくりを続けていってくれと繋いでいくわけです。

街づくりとして言えば、例えば現在では大通公園が有名であるかと思えます。創成川

と、大通が百五メートルの幅がありまして、ご承知の通り現在はさつばろ雪祭りの会場にもなっておるわけですがこの百五メートルの道幅、どうしてこんなに幅の広い道を作られたのかといいますと、火事が起きた場合のその区間まで燃やし、自然鎮火を図るための幅でございまして、これは今の我々には考えられないことです。当時は消火施設消防施設というのはほとんどないわけですから、燃えるところまで燃さざるを得ないわけでございます。百五メートルの道幅で食い止める消防、消火施設の意味を持っていたんであります。そこが今日では大きなイベントができるようなそして市民の憩いの場となるような公園になつてゐるわけであり、これが今日の大通公園であるわけなんです。やはり当時の方々は自然を非常に大事に使つていたと感じます。今の全国各地で「鎮守の森」が本当に年々減つてゐるんです。今でこそ、今だからこそこの「鎮守の森」というのが大事にしていかなければならないわけであります。しかしながらどうしても行政というのは、神社境内に道路がかかつていればそこを削つてしまえばいいという心ない、安易な行政がまかり通つてゐるのも事実であります。毎年東京ドーム何個分というように境内地が減つていつております。このことは自然を大切に守つてこられた先人達や未来を担う世代の方々に對して大変申し訳のない現代の神職の、神社界の行為でもあるかと思ひます。行政と喧嘩状態のよ

うなところもありますが、しかし例えば擦り合わせで土地の交換であつたりもできますし共に手を取つて「鎮守の森を」保ち連綿と繋げていくことが大切だと思ふんです。

話が横にそれましたけれども、そういう風にして島義勇という方は二百年三百年先を見据えて北海道の札幌を墾り開いてくださったわけであります。幕末から明治の維新までの間は薩長土肥という四つの雄藩がありまして、それぞれ薩摩、長州、土佐、肥前は佐賀です。この中で佐賀は明治維新に対しての出方を見ると出遅れた、とある意味では思ふ人もいるかもしれませんが、しかしながら鍋島直正公という方は大変人望に優れ、人材を育てるといふ点においては大変優れていたのかなと思つております。現に副島種臣や江藤新平、島義勇等素晴らしい働きをされた方々を育て上げたことからそのように思います。そしてそういった方々は自分のことよりも、子や孫にこれほどの苦労はさせたくないといふ一心でこの石狩の大地の開拓にも携わつて下さった。当時の方々の恩恵を彼ら自身は何も受けることなく、その恩恵を受けているのはまさに今の私達であります。

私達の住んでいる日本の食料自給率は四十パーセントありましたが、百人いれば六十人が餓死をする状態、四十人が食ふことができ、それが昨年辺りから三十九パーセントに減つたんであります。一パーセント減つた。一パーセントというと日本の人口は約

一億二千万人ですから、単純に国内生産だけでは一パーセントで百二十万人は餓死する人が増えるという状況なんです。そういう中で北海道の食糧自給率は二百パーセントなんです。百パーセントで北海道の五百五十万人が食えることができ、その他に五百五十万人分を道外へ送ることができるわけでありす。

一方で昨年は一週間の内に三度も台風が北海道に上陸しまして、本来あまりそういったことはないのですが、大雨で北見の方では玉ねぎが、あるいは十勝のジャガイモがダメになっちゃったり、特にジャガイモの不足は深刻でポテトチップスの製造、販売が中止となるほどの被害となりました。日本の全体の悲劇にも捉えられてしまいましたが、今の農家の方々はそうした災害に対して耐えられる工夫を野菜あるいは米、果物にもそうですし研究に研究を重ねながらおいしいものを作ろうとしてくれているわけでありす。そうしますと、開拓初期の当時は函館くらいにしかお米はとれなかったんですが、今は気温が二度ほど上がっているおかげで環境の変化と、研究も進んでおりますから最近北海道での米の生産場所も広がり、北海道のお米も美味しくなってきたというわけでありす。ただブランド化はされておりませんので農家の方にとっては少しでも高い価格になって頂けたらありがたいという意向はありますが、こうしたことも考えてみますと、やはり当時の明治の

方々のおかげなんです。

十勝には、静岡県の方々がたくさん入植されており、その中に松崎の豪農の出で依田勉三という方がおりました。依田勉三は畑作を一生懸命やるんですが日照りで枯れてしまったり、実が入らなかつたりすれば品種改良を考えいろんな苦勞を重ねてやっと今年が取れそうだななんて思っていると、イナゴの大量発生年に当たり全部食い荒らされてしまったそうなんです。結局残った殻を野積みにして焼かないといけないくらい実がないう状態だったそうで、依田勉三と一緒に入植した方達もだんだん逃げ帰るように帰郷してしまう。そのような中でも、依田勉三さんは苦勞に苦勞を重ねながらイナゴの襲来にももみ殻に火をつけて煙をたてて防いだり、或いは品集改良を日々重ねたり繰り返し畑作に尽力されました。その結果今日の、豆が主でありますが農産物の大国に並んでるのであります。一昨年でしたか、三笠宮彬子女王殿下が子供たちと一緒にかまくらを作って餅をつきあんこ餅など食べさせる体験をさせてもらえないだろうかというお話がありまして、その際東京に在ります「とらや」の羊羹の若社長が来るということで、打ち合わせの際、私は生意気に提案されたかもしれませんが「たいそうなお店の若社長に来ていただくのは恐れ多いです」と申しましたところ「うちの小豆は十勝の小豆を使ってるんですよ」と仰い

まして、ご承知の通りかもしれませんが伊勢の赤福も米、アンコは北海道のものを使っているそうで、はたまた京都の和菓子屋でも北海道の大豆を使ってあんこを作って下さっているんです。それほどまで十勝のあんこは今日では人気になっているわけですね。これも依田勉三さんをはじめとする開拓の先人達のご尽力の賜であらうと思います。

先例といたしまして昭和十三年に北海道開道七十年という年だったんですけれども当時の長官が全道から功績者の名前を募集して叙勲やら官位を受けた人が残っていきまして三十六人を定められました。そして当時北海道の歴史を編纂した大学教授などにも携わっていたいて開拓神社という末社を作りこの三十六人をご祭神として祀ることが北大の教授や専門家を招いて決められ、八月十五日に蝦夷地を北海道と改称した日に因んで例祭とし、毎年奉仕をしておるわけでございます。そのような中で十勝管内の全市町村長、商工会議所会長、会頭の方々より依田勉三をぜひ開拓神社のご祭神に加えていただけないか、三十六柱に一柱を御増祀して神様としてお迎えしていただけないかという陳情が戦後ありまして、当時の札幌神社の宮司に申し入れがあり、責任役員会を開いて要望を審議し、増祀が決まり三十七柱の功労者をお祀りしているのが今日の末社となります開拓神社のご祭神でございます。来年北海道は命名されて百五十年という節目を迎えますが、たっ

た百五十年とはいえ当時の方々の苦勞というものをほとんどの方がわからないというのが現状であります。私たちは毎年三十七柱の神をお祀りし神輿の渡御もございますし子供のお神輿も併せて巡行します。今日の発展した札幌の街並みを神様にご覧いただくという想いで渡御も始めたわけですが、認知度としましてはそれほど高くないのも残念ながら実情でございます。しかし一方では平成の五年くらいからでしょうか、担ぐ神輿としては四・五トンの樺造りの大変大きな大神輿が巡行されるようになりました。一回に二百人が肩を入れないと上がらないほどで、また長くかついでいられない為、総勢六百人以上集まらなると神輿が上がらないというそれほどの大神輿でございますから、お宮の予算の関係もありまして三年に一回という形で大神輿を出しておりましたが、三年は長すぎるという申し入れがあり、最近では二年に一回大神輿が出てゐるわけでございます。そのように当時の方の苦勞というものをやはりわれわれは次の世代に伝えていかなければならないわけでありまして、神社としても神職としても考えていかなばならないと思っております。

やはり自分の国元親元を離れ難破する舟もたくさんあるなか命からがらの原野に入つて開拓にご尽力され、北海道を墾り開いてくださった先人達の苦勞のことをもつと我々一人一人が考えなければなりません。特にこの地域は北海道神宮の境内は島義勇は「円山」

という二百五十メートル余ある山がありそこから神様を祀る場所はどこが良いかと視察し「三面山囲み一面開く、これは正に神々が天から与えてくださった処」と漢詩に残しこの開拓の神々を祀るための場所を見定めた訳でございます。つまりこれだけの開拓をする以前に、まず神様をどうするかをお考えになったんです。その大元は明治天皇様がお示しになられたということにも繋がってくるわけですね。この明治天皇様の大御心により北の大地が開拓されてきたということを、昭和の十一年頃から明治天皇様を当時の札幌神社にお祀りさせていただきたいという道民の気運が上がりまして、戦後二十九年頃昭和天皇の行幸の際にまた明治天皇様のご増祀の運動が再びおこるんであります。そして知事をはじめ、全道市町村長、議会議長や経済界こういった関係者の方々のご賛同を経て神社本庁に具申をし、道民の切なる願い、祈りを受けて本庁は宮内庁へ上申をされるわけであります。その中で昭和天皇様のお耳に達することが出来まして「北海道民の方々が、自分の祖父である明治天皇様をその神社に迎えたいという旨、なんとかしてあげられないだろうか」とお考えくださり、明治神宮さんも加わっていただいて、明治神宮のご祭神である明治天皇様の分御霊をお出しすることは可能であるという見解を頂くんですね。それならばと昭和天皇様が「そういうことならばなんとか北海道の札幌神社に明治天皇をお祀りされたらどう

か」と詔が出まして、昭和三十九年の十月五日にこちらに御増祀のお祭りが斎行されたという事で、今日では開拓三神と明治天皇様を合わせ四柱の神々をお祀りさせていただいておるわけであります。

先般六月の十四、十五、十六、十七日と御本社のお祭りが斎行されました。この時御鳳輦が四基出るんであります。明治の十一年に渡御が始まり神輿が一基出まして、その後三柱お祀りしてありますから御鳳輦になり三基出御することになります。札幌の街中を渡御するようになる。そして昭和三十九年以降明治天皇様をご増祀しましたので御鳳輦は四基になり、街中を渡御する形で今日に至っております。また、各町内の中で九つ山車を持っていましたので、こちらはお祭りとは別に山車連合として渡御をしていたんですが、さつぱる祭りをより賑やかに、そしてそれぞれの町内会も大きな励みにもなるということで、昭和五十年代頃でしたでしょうか、その時に御鳳輦の後に繋がって渡御を行なうようになり、千二百人余、長さも一・五キロメートル近くの大行列になったのであります。一時は馬に乗っていた時期もありましたが今は馬車に乗る形になっておりまして、昔は北海道も馬の産地でありましたが最近は数が少なく、競走馬や愛玩用の馬そして小型の馬ではあります。今日のお祭りの際にはお手伝い頂いております。そういう中で馬に曳かれて渡御をする

んですが、各年当番の区、年番区がありまして、年番の奉仕する町内会を中心に渡御が行なわれます。私も馬車に乗りますが、馬が街中を歩くことは珍しいことですから、親子で渡御を見に来られた方も「お馬さんだ！かわいい」と喜ぶんですね。また宮司の乗る馬車には巫女も乗るんですが、これもまた「巫女さんだ！かわいい！」と笑顔で手を振って下さるんです。今の時代だからこのようなお祭り、渡御をすることも大事なのかなとも思っております。

そうして私達が毎年賑やかにお祭りをご奉仕出来るのも開拓に尽力された先人達の御陰なんです。その結果が、今日の我々の生活を支えてくださっているという風に思いますと、本当に当時の方々はこんな仕事いやだとか苦しいからやめるとか、そんなこと仰らず、この苦しみや苦勞を子や孫にだけは伝えたくないという一心で一生懸命に開拓に尽力下さったんだと思いますし、そうしたなか、我々はこれからの時代にどのようにして伝えていくかということが非常に大事なわけでございます。我々としまでもやはりなにも見返りもなく一生懸命にこの北海道、札幌を開拓をして頂いたわけでありますから、少なくともこうした年ごとのお祭りに際して欠かさず奉仕する、ということも一つの使命であろうとおもいますし、北海道という近代の新しい土地での恩恵を受けている者全員、先人達の想い

を繋いで受け継いでゆくことも使命であろうかと思っています。勝手な話を申し上げましたけれども、時間となりましたので私のお話を終わりとさせて頂きたいと思っています。ご静聴ありがとうございました。

拍手 合掌

芝 幸 介

本日はようこそ椿大神社にご参拝くださいました。それでは皆様のご祈祷ご奉仕を申し上げます。

さて、こちら御神前におきましては、皆様には二礼二拍手一礼でお参りをいただきます。神社神道ではこの作法が最も基本の作法となっておりますが、時折、社頭の参拝の方を拝見させていただくと、(動作を交えて)二礼をした後にいきなり拍手を打つ方がいらっしゃいます。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、神社での正式な拍手というのは(動作を交えて)二礼をした後に一度手を合わせて、合掌をしていただいて、それから右手を左手の指の第一関節くらいまで下げてずらしします。そのあとに二拍手をして、右手を戻して揃えます。

これが、正式な拍手「かしわで」の作法であります。

私は、この一度合掌をしてから作法が始まるということに意味があるのではないかと思います、合唱と言いますと一般的には、ご先祖様やお寺にお参りされた際には皆様も合掌されると思います。

そして仏教の発祥と言われるインドにおきましても、右手は清らかな手、清浄の手と呼ばれまして、それに反して左手は不浄の手と呼ばれます。使い分けもされ、これは人間の中の相反するものですよね、この相反するものを合わせることによって、この合掌の手に人間の現実の姿を表しているそうなんです、所謂ありのままの真の姿です。

実際、神社やお寺にお参りする時は（動作を交えて）皆様も合掌して目を閉じてお祈りされるのではないかと思います。この時というのはですね、不思議なことに、普段はなかなか人に対して面と向かって素直に言えないことも、合掌して目を閉じていますと、神様や仏様に心の中で素直に打ち明けられるといいますか、なんでも告白できるといった心情になったことがあるのではないかなと思います。

ある意味これも、ありのままの真の姿というのにも繋がるかなと思うのですが、自分の本心、真の心を、神様や仏さまにお伝えするのに最も適した姿、相応しい姿が合掌なんだ

と実感致しております。

そういった意味も含めてでしょうか、合掌は祈りを手の姿に表したものとも言われているそうです。

また、拍手をする前に一度手を合わすということは、一瞬ですが間（ま）を作るんですね。この一瞬の間（ま）に神様と対峙する、神様と向き合うために気持ちを集中したり、心を整えるための貴重な時間になるわけです。

一瞬ですが、合掌しますと、不思議なことに今まで慌ただしかったり、よそ事を考えていても、合掌をするだけで、一瞬ですっと集中できるものです。一瞬で神様と向き合える自分になることができます。これが大切なポイントじゃないかと思っております。

そして、次に神道の拍手について申し上げます。

実は長い歴史を有しています。魏志倭人伝という歴史書がございます。これは教科書に名前が出てくるような歴史書で、三世紀の日本人の習俗などが記されています。その中の記述では、日本人は目上の人や尊い人に会うと拍手をして、その方に対して尊敬・敬意を表していたという事が書いてあります。

三世紀と言いますとだいたい一八〇〇年くらい前ですので、日本人は一八〇〇年前から、

もしかすると、それよりもずっと昔から尊敬・敬意を示す作法として拍手を用いてきたことが分かるわけでございます。

そして、昔は敬意を払う対象として神様や人に対して拍手をして敬っていたのですが、歴史が変わっていく中で、いつしか人に対しては拍手をしなくなつて、現在では神様に対してのみ拍手をしてお参りをするというのが、この拍手の作法の歴史的な流れと言われております。

この作法は、私たちのご先祖様がずっと大切に守り継いでこられた、いわゆる日本の文化・伝統と言つても間違いのないものだと思いますし、長い歴史の中で、要らないものというのは歴史の途中で無くなつていきますので、拍手の作法が無くならなかったということとは、その時代時代の中で必要とされ大切に継承され、伝えられてきたからだと思つております。

しかしながら、こういった信仰に関わることというのは現代では、なかなか学校等で教えていただける事ではございません。ですから、今生かされている私たちが、家庭や社会の中でお子さんやお孫さん、企業の中であれば若い社員の皆さんに、自分自身が背中をみせて教えていくべき事、子々孫々に伝えていくべき大切な日本の文化、伝統ではないかと

思っております。そして、文化、伝統と、手を合わせることから始まる「祈り」の継承のお役目を、私たちがいただいているのだと思います。

本日は、御祈祷をお受けいただくため、皆様には御神前にお進みいただきました。おひとりとおひとりの心の中にいろいろな御祈願があるのではないかと思います。また、皆様へ様々な御奉告や、日々無事に過ごさせていただいている感謝・御礼など、皆様の心の中にはそれぞれ多様な祈りがあると思います。

しかしながら、祈りというものは、ご神前でどれだけ一生懸命一心に念じてみても、姿・形が目に見えるものではございませんので、そういった意味でも、祈りという目に見えないものを、目に見える手の作法であります、合掌や拍手の作法を通して、その手に皆様の真心を添えて、神様としつかり向き合ってお参りいただければと思います。

苦しい時の神頼み

浦 隆 一

故事ことわざ辞典では、苦しい時の神頼みの解説を、「困窮し追い詰められた時にだけ、ふだんは神仏のことなど思い浮かべることのないような者が、ひたすらそれを拝み倒し頼ろうとすることの身勝手さをいう。転じて、いつも知らん顔をしている者が、自分が困った時にだけその人に頼ろうとすること。」とあります。

私の奉務神社は、芽生えと書いて、メム神社と言います。当神社は、北海道深川市のメム地区に御鎮座し、神社本殿が落成した日に、カタカナでメムと書くよりも漢字で芽生めげえと書くことが縁起が良いとなりました、芽生（メム）神社と奉称することが決められました。芽生えは恋が芽生える、子供が誕生し子孫が繁栄する、作物は芽生えがあつてこそ実が成る。何事においても芽生えが肝心で、事の起こりの意味も含まれております。

さて、近年いつのまにか芽生神社は、恋が芽生える縁結び神社として俄かにではありま

すが、独身女性が参拝に訪れるようになってきました。ほとんどの参拝者が、札幌や旭川方面から訪れまして一様に縁結び祈願をされて縁結びまもりを、お受けになれます。そして賽銭の額なのですが、縁結びの御祈願に来られるほとんどの方が、十分御利益がありますようにと言うことで、十五円です、これには神社といたしましては、いささか苦笑せざるをえない訳ですが、まあ、参拝者が来ることは、有り難い事です。お守りを受けられる女性のほとんどの方が私と何かしらの話をされていきます。女性に年齢を聞くことは失礼とは思いますが、「おいくつなんですか」と尋ねると「三十何歳です。」という方が多いわけですが、なかには、「三十五歳過ぎて結婚相手見つけるのに必死です。」という方もかなりの人数がいます。中には「この御守り本当に効くのですか」と尋ねる方もおります。そういう時は「神社参拝によく来られるかたで、彼氏ができたとか、結婚することになりましたという方がいますよ。」とお答えることにしています。神社に縁結び祈願の参拝も大切ですが、やはり努力することが一番肝心ではないかと個人的には思う訳です。何の努力もしないで神社に縁結び祈願して御守りを買えば、彼氏や婚約者が簡単にできると思い込んでいる女性が多いように見受けられます。芽生神社の縁結び守りを、お受けになり婚約者が現れれば幸いではありますが、そういう事は奇跡に近く市販の風邪薬や胃腸薬か

なにかと同様のあつかいをされている方が大勢いるように思われます。まあ、神社としてはお土産感覚で御守りを受けていただく事は大いに歓迎しますが、風邪薬感覚で購入して、さっぱり効果がなかった。などとフェイスブックかなにかで広められても困るわけでした。

御守の話はこれくらいにしまして、神社の御祈祷を受けにこられる方に、稀にですが体のあちらこちらが痛くて体調も優れないので、お祓いをしてほしいという方が来ます。神社としては特別お断りする理由もありませんから心身安全祈願の御祈祷をいたします。こういう方々のお話をきいていると病院へ通院しているけれど、なかなか良くならないので神社でお祓いを受ければ治るかもしれないと言います。このような方とお会いして私の個人的な感想では生活習慣に問題があるように思われます。お祓いを受けて帰られるときは、すっきりした表情で精神的には多少の効果はあるのではないかと思われます。ただ、こういう方々は神社参拝の作法が全く分からないで御祈祷を受けに来られますので、出来るだけ御祈祷の前に参拝作法を指導することになっています。

参拝作法の中でも特に玉串の受け取り方、供え方、再拝二拍手一拝について教えることにしています。むしろこのような方々には、神社といたしましては参拝作法を教える事のほうが大切なかもしれません。

さて、苦しい時の神頼みとは、何の努力もしないで縁結び守りにすがり婚約者あるいは彼氏を懇願する女性。体の調子がおもわしくないときにだけ、病院では治らないから神社にきて拜む人。まさに自分が困った時にだけ神社参拝することとして、はたしてこのような心構えで神様に受け入れていただけるでしょうか。このようなことを神様が受け入れていただけるのであれば、人付き合い、医療、病院などはいらないのではないのでしょうか。

神社の御利益は、苦しい時の神頼みで簡単に得られることはありません。御利益を得られる方というのは氏神様へ毎日のように参拝にこられたり時には境内清掃の手伝いをしたり、神社の年中行事、たとえば例祭ですとか正月などに御奉仕される人などは、氏神様に日々感謝しています。日常生活において氏神様への感謝の気持ちを現すことが大切です、ご家庭の神棚に毎朝感謝の気持ちを現して拜むことも大切です。

苦しい時の神頼みと言う、非日常的なことで神社参拝をするのではなく、常日頃、氏神様に感謝し、またご家庭の平穏に感謝することが本当の神頼みではないかと思えます。

明治以前のアイヌ民族

小林 晴 美

今月も「おついたち参り」に、ようこそご参拝頂き有難うございました。

今回は明治以前のアイヌ民族について少しお話をしたいと思います。

皆様も北海道へ旅行された時、コースによつてはアイヌ村へ案内して頂いたのではないのでしょうか。私も五十年前も前の話になりますが、初めて北海道へ行き摩周湖を見た時には、あまりの美しさに言葉を失いました。けれども一番印象に残ったのは、アイヌ村で見たアイヌの方達の風貌でした。黒色の着物に似た衣服にほどこされた白い文様は、とても新鮮でインパクトがありました。

後日知ったのは、あの文様には基本的なものが三つあり、一つは「モレウ」と言つて渦巻文様で、川の流れの渦や流水・風・木々からまるツル等から考案されたもので、「力」「パワー」と言う意味があり着ている人に力が備わるようにという願いがこめられているそう

です。又「アイウシ」と言つて数学で使う中括弧に似ていて、中程がトゲのようにとがつているので着ている人が外敵や病氣等から身を守るといふ思いが込められており、魔除けとしての意味もあるので着物の襟や袖口、裾廻りにこの刺繍をして魔物が体内に侵入出来ないようにとの願いが込められているそうです。三つ目は「シキ」といって星のようにも見える形で、空の星のように着ている人を優しく見守るといふ意味が込められているそうです。

この三つの文様を基本にして組み合わせ、あの独特の文様が生み出されており、これらの文様は祖母から母へ、さらに娘へと母方の系譜に従つて伝えられました。そしてこの文様は地域によつて微妙な違いがある為、昔は服を見ただけで何処の地域のアイヌ（千島アイヌ・樺太アイヌ・釧路アイヌ・石狩アイヌ等）が知る事ができ、同じ文様同志の結婚は出来なかったとのことでした。このようにアイヌ文様は、アイヌ文化を代表する一つであると言えます。

又、アイヌの人達が長い時間をかけて受け継いできた文化に『口承文芸』があります。これは文字をもたなかったアイヌの人達が、先祖からの言い伝えや習慣、社会や自然の中で生きていく為の心がけ等を節を付けたりして歌うように語るもので、「ユカラ」や「カ

ムイユカラ」と呼ばれているものです。アイヌの子供達は、何度もお爺さんやお婆さんの語る「カムイユカラ」つまり神々の物語を聞いて神と人間の関係を学び、生きていく知恵を身につけたと言われています。「ユカラ」の中には長い物語もあり、語り終えるのに何日もかかるようなものもあるそうです。又お互いの意見が合わず日本人なら喧嘩になるような時にも、お互いに納得するまで歌うように主張し語り合つて解決したそうです。

このようにアイヌの生き方は、ゆつたりとおおらかで静かに自然と共に暮らしていたのです。そして自然界を人間と同じ生き物だと考えていた為、例えば夕方風がやむ「夕風」を、風だつて腹がすいたら食事をするので吹かないと考え、夜は川や湖等自然界も人間同様眠ると考えました。

又、アイヌの人達は鮭を主食としていましたが、鮭は人間の為だけに川を上ってくるのではなく、山にいるフクロウやキツネ・熊等の他の動物の食糧としてもやってくるのだから、人間が独り占めしてはいけないという心優しい考えの持主でもありました。捕獲した鮭は人間の為に獲物になってくれたカムイ（神）であるから、無駄なく使いきり食べつくす事が礼儀とされた。鮭はカムイであり、その鮭を食べる為の器もカムイである。アイヌの人々にとって、人間が生きていくのに必要なものの全てに魂が宿っていると信じ「カムイ」

国を巡る旅で長崎にいた時、このロシア南下を知り日本の将来に危機感を抱きました。そこで武四郎は当時蝦夷地と呼ばれていた北海道へ渡り、千島列島・樺太・蝦夷地を踏破して地図を作製すると同時にアイヌ民族の実態を調査しました。その結果、松前藩がアイヌ民族を労働力として酷使した為、人口が激減したことを知り幕府にアイヌの人々の生命と財産を守るべきであると訴えました。

又、日本の将来を憂いアイヌ民族が暮らす北限である樺太中部のシツカ（敷香）に伊勢神宮を、シリマオカ（後真岡）に熱田神宮を勧請することを考え、この地が日本の領土であることをロシア側にはつきり示すと共に、土地の人々にも日本を意識してもらい大切に祀ってもらいたいと願いました。しかし武四郎は、六度に渡る徒歩での厳しい環境のもとでの蝦夷地調査で病に倒れた為、勧請の為に必要な神鏡・神剣・鈴や提燈・神酒徳利その他必要な品々を事細かに記して、幕府へ準備するよう求めていましたが烏有に帰してしまいました。武四郎の熱意を後継する者がいなかった事は、返す返すも残念でたまりません。そして明治維新を迎え蝦夷地を改称することになった時、武四郎が「北加伊道」の案を出しました。これはアイヌ民族が「カイ」を「この国に生まれた者」と言う意味に使用する為、「北にあるアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めて提案したのです。政府で

検討された結果、「蝦夷地」は現在使用されている「北海道」に明治二年に改称されました。故に武四郎は、「北海道」の名付け親とされております。

以上、簡単ですが明治以前のアイヌ文化や歴史をお話いたしました。

我々は、アイヌの人達が自然を心から敬い人にも動物にも人間が作り出した物にも感謝をする人間本来の姿を見習って、より良い日本を目指すべきだと考えます。

(兵庫県 三石神社 権瀬宜)

寒中みそぎについて

西山智史

本日はようこそ北海道神宮新成人寒中禊会に御参加頂きました。

新成人の皆様には、この一月下旬、水槽には薄い氷が張り、降り積もる雪の中、屋外で禊をして頂きました。皆様にとっては、これまでも、これからもそう簡単に体験する事の出来ない特別な体験をされたことと思います。

禊は神社で奉仕する者、とりわけ神職、神主の正式名称でございますが、神職は必ず潔斎といって水又は湯を浴びてからお祭に奉仕しております。心と体を清めることはもより御神前、神様の前での作法が滞りなく納められるよう、お祭中不測の事態が起こっても落ち着いて対処出来るようにする為に潔斎、禊は行われます。

皆様にもこれから禊を続けて行く意味があると思います。日の始まりに水や湯を浴びて心と体を清め、お祀りをされている方は神棚に拝礼して、今日一日を一生懸命に生きる、

予期せぬ出来事にも狼狽えずに対応する為に禊をするのであります。

この北海道には寒中禊を特殊な神事として齋行している神社があります。北海道の南側、道南は木古内町の佐女神社で、毎年一月十三日より一月十五日の三日間齋行されている寒中みそぎ祭でございます。

神事の由緒から申しますと、一八三一年一月十五日の早朝、「御神体を清めよ」と神社を守っていた者の夢枕にお告げがあり、すぐさまその者は神社の真下を流れていた川に向かい、川に張っていた氷を砕くと、その冷水を体に浴びて自分の体を清めた。その後神社の御神体を抱き海岸に目をやると、河口には波に打たれた大鯨が見え、その背中の上には白衣を着た美しい女の姿があった。女を神の聖なる使者であると信じた者は、御神体とともに何度も極寒の海へ沐浴した。しかし氣付いた時には既に女の姿はなく、河口にいた大きな鯨も上流へと上り、小さな沼へ消えていったとされる。宮守が御神体とともに海へ入り、自身の体と御神体を清めたその年からは、不思議なことに村の豊作豊漁が続いて天保の大飢饉を乗り越え、賑わいを見せた。というもので、今年で一八七回を数えます。

現在は行修者と呼ばれる町に住む純粋な若者四名が一月十三日より神社に籠もって山から引つ張ってきた湧き水をひたすら浴び、水垢離をして体を清めて、十五日にみそぎ浜と

名前が付けられた浜にて、別当・稲荷・山の神・弁財天の木像の御神体を海水にて清めて豊漁豊作を祈願しております。

実は私はこの木古内町の出身であり、この特殊神事にも奉仕させて頂きました。当時の感想も交えて祭の流れを紹介させて頂きたいと思います。

十三日の午前中より集合し、散髪・入浴・昼食を取ります。参籠、お籠もり中は四つ足の物は一切口に出来ないという決まりもあり、大体がカツ丼を食べます。午後三時より神社にてお籠もりの準備。行修者は期間中神社の拝殿にて寝泊まり致します。お籠もり中の決まりがいくつかあり、ひとつめは食事に関して四つ足を取ってはならない。ふたつめは、言葉の「し」と「す」には濁点を付けるというものです。この濁点を付ける理由に関しては諸説あり、一番広く知られているのが「し」と「す」は、この地域の間人が発する訛りの為どちらも同じ音に聞こえてしまう。「し」は死という神社には適さない、厳しい鍛錬をしている者が聞く言葉ではないという理由から濁点を付ける様になったとのこと。私が実際に行修者であった時に感じたことを付け加えると、寒中みそぎは過酷なものであり、集中して行わなければいけない。発する言葉に条件を付けるということは集中力を要し、この参籠中は集中力を常に保つようにする為この決まりがあるのではないかと思いま

した。

神社の拝殿午後六時半よりこれから神社に籠もることを神様にお伝えする参籠報告祭を齋行の後、最初の水垢離を行います。作法と致しましては、オマニシグギダの太鼓が打ち鳴らされる中、神社の拝殿より四名禪姿で外に出て列をなして石段を下り、メ縄が張られた水槽にてみそぎを、水垢離を行います。四名のうちの一番上位の者が桶で水を取り他の三名のうち一名が水槽に背を向け地面に膝をつき、腕を組んで、背で水を七回受けます。三名がかぶり終え上位の者が桶で自ら七回かぶりまた列をなして拝殿前に進み、また石段を下り：この作法を水槽の水がなくなるまで続けて拝殿に戻り暖を取りまた外に出て：をひたすら繰り返します。オマニシグギダの太鼓というのは、ニシンが大量に浜へやって来たことを皆に知らせる為、漁師に打たれていた太鼓のリズムでございます。大漁を予感させる太鼓の音と共に、豊漁豊作を祈るみそぎが行われております。夜は三時迄行い早朝五時に起床。太鼓の音で起床して、すぐさま禪姿になり水垢離を始めます。二日目はただひたすら水垢離です。三日目は正装をして行修者が四人それぞれ御神体をもって、ロボを組みみそぎ浜へ向かいます。浜に到着して準備が出来次第海へと進み、沐浴致します。御神体がどこかへ行ってしまったように、行修者四人で向かい合い、御神体に海水を両手

でかけ清めます。最後に上位の者が海の沖、出来る限り沖まで泳ぎ豊漁豊作を祈念して沐浴は完了します。その後は神社へ戻り、御神体を本殿へ納める祭典を齋行して終了となります。

以上で寒中みそぎ祭の御紹介は終わりますが、今年この寒中みそぎをされたのは参加者である皆様のみでございます。ここにはいない同級生達は通れない、成人になるための儀式を皆さんは通過されたのでございます。自分が寒中みそぎに挑みやり遂げたことに自信を持ち、もう未成年ではない、責任ある大人になったのだということを今一度感じ、考えて頂けたら開催させて頂いた当宮と致しましても、誠にありがたい限りでございます。本日は皆様おめでとうございました。

(北海道 北海道神宮 権禰宜)

チャンネルを合わせる

滝沢 正太郎

これをもちまして初宮詣での御祈祷滞りなくお納め致しました。大神様のお力を戴かれまして、お子様がすすくと健やかに成長されますことをお祈り申し上げます。

この後、お子様の名前の入ったお札をお渡し致しますので、ご自宅の神棚にお祀りいただきます……

あ、神棚が御座いませんか……では、今回初宮詣でのお札をお受けになられましたことを機に、是非ご自宅に神棚を設けて頂きますことをお勧め致します。

お子様がお休みになつて居るようですので、少しお時間宜しいですか。

神棚は、「神様のお力が宿つたお札」をお祀りするところでございます。このお札やお守りについてよく聞かれるのが「どんな効果がありますか」や「効き目は一年ですか」といった、効果や効き目という言葉です。こういった表現の善悪は置いておいて、「お札」は御

神体では御座いません。よって、効力や効き目……これは御神徳という表現の方が適切ですが、ただ単にお札を持っているだけでは何の意味も御座いません。お札は、ゲームに出てくるような万能のアイテムではありません。

ここからは、考え方の例えですので、俗な表現になってしまいます。上手に聞いて頂きたいのですが、神社はラジオで言うところのテレビ局、テレビで言うところのテレビ局です。御神体がお祀りされており、様々な御神徳を発信する場所でございます。そして、ご家庭の神棚に納めてあるお札は受信機と考えて下さい。いわばラジオやテレビです。こう考えると、自宅に居ながら神棚に手を合わせる事で、神棚を通して神宮や氏神様、崇敬神社を拝むことが出来、お祀りされている神様の御神徳、御加護を戴けるのです。

しかし、ご存知のようにラジオやテレビは置いてあるだけでは何の情報も得られません。周波数やチャンネルを合わせて、初めて本局からの情報をキャッチ出来ます。これはお札も同じことです。置いてあるだけでは意味がありません。然るべき場所（神棚）にお祀りをしてチャンネルを合わせる必要があります。実は、このチャンネルを合わせることが大切なのです。

ではどのようにすればいいのか……今から申し上げる三つのことを実践して下さい。

まず、掃除をして下さい。神棚のある部屋は勿論、玄関や敷地もです。神道は「祓いに始まり祓いに終わる」というくらいお祓いを重んじます。清掃は、神道の原点と言えるでしょう。綺麗な処には、正しく正常な氣が生まれます。一方、汚く乱雑にしていると悪い氣が立ち込め、空氣も淀んできます。そんなところにお札を祀っても、神様の御神徳は半減するでしょう。到底チャンネルなど合いません。

もちろん神道に限らず、「掃除」の素晴らしさ大切さは、仏教でも説かれています。

お釈迦様には、多くのお弟子さんがいました。その中に、周利槃特（しゅりはんどく）という男がいて、彼は自分の名前も忘れるくらい頭が悪く、弟子の中でも一番出来が悪いので、難しい書物など読まず、ずっと掃除ばかりするように言われます。彼も、他のことは何も満足に出来ないのです、言われるままに毎日毎日掃除ばかりしていました。やがて二十年の時が経ち、彼はあることに氣が付きます。「ああ、この世は掃き清めるところなんだ」と、結果、彼はどのお弟子さんよりも早く、「阿羅漢（アラカン）」という悟りの境地に達したと言われております。

さて、神棚を設けてお札をお祀りし、掃除を致します。次に、お供えをして下さい。

神社では、毎朝神様にお供えをするお祭りを行います。神宮では、朝と夕に二度、お供

えをする為のお祭りをいたします。

神社と神棚が通じているのですから、当然家庭でも毎日お供えを上げるべきです。

神様は、神棚を通してあなたの家庭、家族を守って下さいます。米、酒、塩、水で十分ですので、感謝の氣持ちを持つてお供えをして下さい。

そして両脇の櫛は、枯れることの無いよう注意して下さい。枯れた櫛をそのままにしていては、神様の氣も枯れてきます。

最後に、家族全員が毎日神棚を通して、お祀りしている神社を思いながら、神様に手を合わせて下さい。朝は「今日一日御守下さい。」

夜は「今日もありがとうございます。」

掃除、お供え、手を合わせる……こうする事で、しっかりチャンネルは合います。あとは、神社から送られる神様のお力、御進徳を存分にお受け下さい。今回、あえて神様の氣を電波に例えました。波と波は、周波数と条件が合えば、2倍にも3倍にも大きさを増します。逆に、互いの周波数が違えば、打ち消し合い、力も消えてしまいます。

神棚を設けてお札をお祀りし、神社、神様からの御神徳をいただくには、こちらも周波数（チャンネルを合わせる）ことが大切だという話でした。

神棚の設け方、お札のお祀りの仕方は後ほど説明いたします。では、お神酒とお札をお受け下さい。

本日はようこそお参り下さいました。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

沖縄県民斯克戦へリ

―遺骨収集で思う事―

小野 日隆

今日は皆様方に「沖縄」のお話をしようと思っています。私は毎年一月の終わりに遺骨収集で沖縄に行き、本島南部の糸満市で奉仕を続けています。沖縄戦は誠に悲惨な戦いでした。昭和二十年四月一日に米軍が本島に上陸以来、六月二十三日に牛島司令官、長参謀長が摩文仁で自決して組織的な戦闘が終結、更に七月二日の米軍の掃討作戦の終了までの間、実に二十万人が亡くなったと言われ、その半数近くが民間人であるというのも、その悲惨さが余計に増す要因です。そして、「鉄の暴風」と例えられた、島の地形が変わるほどの激しい艦砲射撃に晒された島には、まだ三千体とも五千体ともいわれるご遺骨が残されています。そのご遺骨を一体でも多く地上に出してあげて魂をお慰めしたい、の一念で六年前から、修養団が主催するボランティアグループの一員として奉仕を続けています。ここ三年は糸満市の真栄平という地区で作業をしています、ここは糸満市の資料によれ

ば当時疎開できずに村に残留した八百五十人の住人の内、半数以上の四百五十四人が亡くなっています。その真栄平地区にある、アバタガマと呼ばれる洞窟は、戦後、屋敷内や道路、田畑、山野に散在していた身元不明のご遺骨を住民が収集し、収めた、いわば納骨堂のようなものですが、収めたと言っても無造作に放り込まれたような状況であり、時間の経過の中で満足な供養もできないとの地元地区民の声を受けて、ガマの中のご遺骨を地上に出しし、そして摩文仁にある国立沖縄戦没者墓苑にお納めする作業を続けているのです。七十年という時間の経過と、洞窟内の湿気の為に、拾い上げた、掘り上げたご遺骨は手にしたとたんにはらはらと崩れてしまい正に土にかえるという状態の物も多いのですが、一柱でも多くと毎年気持ちを含めて奉仕を続けています。その作業をしながらいつも思う事を皆さんにお話ししようと思います。

皆さんは沖縄といえど何を思い出しますか、何を連想しますか。「南の楽園」「美ら海」「ひめゆりの塔」「サンゴ礁」「戦争」「米軍基地」「オスプレイ」「ソーキそば」「なんくるないさー」……。楽しい事、悲しい事、美しい物、美味しい物色んなものが頭に浮かんでくる事でしょう。私は、昭和五十三年に富士山本宮浅間大社から大分県護国神社に帰ってきた翌年に沖縄県護国神社の春季例大祭に奉仕の為伺って以来、何度も沖縄を訪れていますが、私は、沖縄

といえは浮かんでくるのは一通の電文であります。遺骨収集の作業中もやはりこの電文が浮かんできます。「沖縄県民斯克戦えり」という言葉で有名な、海軍沖縄方面根拠地隊司令官の大田実少将が昭和二十年の六月六日に海軍次官宛てに発信したものでいわゆる「決別電報」と言われるものです。「沖縄県民の実情に關しては、県知事より報告せらるべきも、県には既に通信力なく、三十二軍司令部また通信の余力なしと認めらるるに付き、本職、県知事の依頼を受けたるに非ざれども、現状を看過するに忍びず、これに代わつて緊急御通知申し上げ。」という文章で始まり、戦果報告や応援要請は一切なく、沖縄の人々が生命、財産の全てをなげうつていかに苦しい戦闘に協力したか、沖縄県民の献身的姿勢のみを記したその電文の末尾は、「一木一草焦土と化せん 糧食六月一杯を支うるのみなり」という沖縄県民斯克戦えり 県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」と結んでいます。

今はそんな事はありませんが、私が初めて沖縄を訪れた三十七、八年前の沖縄の内地、大和に対する感情は決していいものではありませんでした。大東亜戦争では日本本土を守るための捨て石にされたというような認識が強いようでした。そんな中でも、最後の官選知事島田穀と、この電文で知られる大田実司令官は沖縄県民からは、特別に敬愛されているようです。それはなぜか、二人とも沖縄県民に対して深い思いやりと、愛情を以て接し

ていたからです。島田叡知事は死を覚悟しての赴任以来五か月間一人でも多くの沖縄県民を護る為に奔走、最後は戦局愈々悪化の中、壕の中で自決します。大田実司令官は、沖縄県民の献身的な働きをつぶさに海軍次官に報告します。この電文には決別電報の常套句であります「天皇陛下万歳」も「皇国ノ弥栄ヲ祈ル」などの言葉は一切使われていませんが、沖縄県民の奮闘ぶりがよく伝わり、尚更に島民、県民の方々の御苦勞が偲ばれるのです。

ひるがえって、今の沖縄はどうでしょうか。国内の米軍基地は、面積で言えば実にその七十四パーセントが沖縄に集中しています。その為沖縄県民の生活は大きな制約を受け、多くの不自由を強いられています。のんびりとおおらかで何処よりも平和を愛する筈の沖縄は、一部の外部の活動家に牛耳られた反基地闘争が表すように、実に不穏な状況にあります。あの悲惨な戦争から七十二年が経った今、「後世」の我々は、どれほどの沖縄の悲惨な過去に対する思いを持ち、心をいたし、「特別の御高配」を実行しているのだろうか。真つ暗なガマの中でひたすら作業をしながら、何時もそう思うのです。

組織的な戦闘が終わったとされる六月二十三日は沖縄慰霊の日とされていますが、恐らくも天皇陛下皇后陛下には、「お慎みの日」として、深く沖縄に思いを致されておられるとお聞きます。今、私たちは、御英霊の尊い犠牲の上に築き上げられた平和な時代

生かされています。今の時代が、平和であればあるほどに、豊かであればあるほどに、遠く沖縄に思いを馳せ、七十二年前、大田司令官が「沖縄県民斯く戦えり 県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」と地下壕の中から我々日本人に訴えた「願い」について今一度考えようではありませんか。

（大分県 八坂社 宮司）

黒と白　　く神葬祭における講話く

村井之介

本日の通夜祭の終わりに当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

私は、葬儀をご奉仕する際にも、また葬儀に参列する際にも、必ず心に留めておく言葉というものがございます。

私事ではありますが、私は、平成十七年四月一日より平成二十三年三月三十一日までの六年間、宮内庁掌典職に奉職をしておりました。掌典職という組織は、皇居の中にございます賢所・皇靈殿・神殿を合わせて、宮中三殿という御殿、神嘉殿、山陵において、宮中祭祀を執行する組織でございます。私は、四月一日に任命を受けまして、その二日後の四月三日には、神武天皇祭同皇靈殿御神楽という天皇陛下が御出ましになられる大きな祭事がございます。私は、右も左も分からないまま先輩の後ろに付いて必死にその準備を行っていた思い出がございます。そうしますと、宮中三殿の区域内で幕を張る箇所がございます。

その幕が、黒と白の幕でした。私は、不思議に思いまして、先輩に「何故、紅白幕ではなくて、黒と白の幕なのでしょう？何かお葬式みたいですが……」と尋ねました。そうしましたら、先輩がこうおっしゃいました。「色の世界にも序列があつて、黒と白は両横綱である。黒は、何者にも染まらない強い色、白は全ての色に調和をする色。天皇陛下が御出ましになられる祭事というものは、最重要祭事である。最重要祭事に使用する幕は、黒と白の鯨幕を使用する。今、あなたはお葬式みたいだと言つたが、お葬式が何か縁起の悪いものの様に思つているのなら、それは違う。天皇陛下は、宮中三殿において、常に黒と白の幕をご使用になられる。我々、一般の人間にとって、黒と白の幕を使用することが許されてゐるのは、葬儀以外ない。葬儀というものは、亡くなられた方にとっての最重要祭事である。まだ、あなたは奉職して一日目であるから、これから先、あなたがこのまま宮中に残るのか、または違う神社や実家の神社に奉職をするのか、それは分からないけれども、神職として神葬祭をご奉仕したり、葬儀に参列をする際は、この事だけは忘れてはいけません。」と、奉職一日目にこの話を聞きました。目から鱗が落ちるとは、この事かと思ひました。色々と諸説はあるかと思いますが、私はこの先輩の言葉を信じています。

また、私の知人から聞いた話です。知人が、数年前にスリランカに旅行に行きまして、

現地のスリランカ人のガイドの方と非常に仲良くなつて色々とお話をしたそうです。そのガイドの方は、三年間日本で働いていたとの事で、日本語も上手で非常に優秀な方だったそうです。そして、旅の終わりに、知人が、そのガイドの方に「日本人の良い所と悪い所を正直に教えてくれませんか？」と聞きました。すると、そのガイドの方は「あなたが日本人だからお世辞を言うわけではありませんが、私は日本人の悪い所が、本当に分からないのです。日本人の良い所は、いくらでも出てきます。まず、礼儀正しい。約束を守る。時間を守る。他の国の人達は、この時間を守ることが、なかなかできません。また、日本人は差別的な目をしません。スリランカの人達は、この肌の色の違いからくる差別的な視線を敏感に察知するが、日本人からは、そのような視線が全く感じられない。そして、最後に、「ガイドさんのおかげで、この旅行が素晴らしい思い出になりました。どうもありがとうございました。」と御礼を言ってくれる。こんな国民は、私の経験上、日本人以外いません。そのような美点の中でも、日本人の最も優れていると感じる事は、日本人は、亡くなった人やご先祖様を大切にしていることです。スリランカは、日本の仏教と違い、小乗仏教であるので、お墓というものがありません。亡くなった方は四十九日を過ぎたら、別の人間に生まれ変わっているのです、お墓がないのです。亡くなったご先祖様達の記念碑

の様なものはありますが、家族がお墓に手を合わせお祈りをするという事がない。自分が、日本で働いていた時、日本人はいつ休んでいるのか？と思いました。朝から晩まで、休日も返上で働いている日本人が、お盆の頃に皆、休暇を取りだした。私は、そこで日本人はバカンスに行くのかと思っていましたが、皆が、故郷のお墓参りに行っていたと知って、心の底から驚いたのです。しかも、日本人はそれを当たり前のように行っている。経済大国日本は、我々スリランカ人にとって憧れの国です。でも、日本人が、真に世界に発信しなくてはいけないのは、この日本人の精神性の高さですよ。』と言われて目が覚めたと、知人から聞いて、私も目が覚めた思いが致しました。スリランカの方からは、このように日本人が見られていると知り、思わず唸りました。本当に、ありがたいお言葉を頂いた瞬間でした。

この葬儀は、本日の通夜祭、そして明日の葬場祭・帰家祭と二日間ございます。この二日間で、ご遺族を始め、皆様の中で、色々と去来する思いが多々あると思います。その思いというものは、もう声を発する事も、動くこともできない亡くなられた方からの、皆様への最後のメッセージだと、私は思っています。そして、この二日間は、ご奉仕をさせて頂く私にとっても、亡くなられた方からの最後の授業であります。私は、大変微力な神職

でございますが、先の言葉を心に籠め、全身全霊で真摯な祈りを捧げ、ご奉仕させて頂き
ます。

本日は、皆様、大変お疲れの所、長い話で恐縮ではございますが、この話をもって、本
日の通夜祭のご挨拶とかえさせて頂いたきます。

本日は、こちらにて失礼を致します。

(北海道 北見神社 権欄宜)

いのり

大竹久雄

本日はご遠路のところようこそご参拝いただきました。

これより皆様方のご祈祷をご奉仕させていただきますが、ご祈祷に先あたり、少しお話しをさせていただきます。

どうぞお楽になさつて下さい。(正座から安座への案内)

皆さん、殿内(外拝殿・神楽殿)の周りをご覧下さい。

長押のところに、ギザギザと白い紙が垂れていますね。これを「シデ」といいます。

漢字では、「紙垂」・「四垂」とか、単に「垂」の漢字で「シデ」と読んでおります。

先程、皆様は参拝に先あたり、手水をなされ、参道をお進みになられ、鳥居をくぐられました。鳥居に七五三縄が張られ、七五三縄にシデが垂れていたと思います。

ここからは清浄な神域ですよ、という標としています。

また、隣の祓殿にてお祓いをお受けになれましたが、幣串にシデを束ね、麻苧を結び付け、大麻という祓具にて皆様をお祓い申し上げました。

この大麻は、祓戸の大神の依り代として皆様を祓戸の大神等のご神威を以てお祓い申し上げます。

ご祈祷の後、ご神前お側近く内拝殿にお進みいただき玉串を奉りご拝礼いただきますが、櫛にシデを付けたものを玉串といっております。

皆様の夫々のお心のお祈りをご神前に、皆様ご自身が直接に手向けるわけであります。

また、地鎮祭など、神籬といつて、櫛にシデと麻苧を結び付け、神さまをお招きする依り代としています。

そのシデの由来は、日本神話の天石屋戸開きの件。シデの原型とする、白丹寸手・青丹寸手に由来します。

何故このようなギザギザとした形状をしているか？というところ……諸説がございますが、無限のご神威の説と、雷光（稲妻）説があります。

「無限の神威」説は、白い紙を交互に断つことによつて、無限大の神威を一片の紙に象徴している。

「雷光（稲妻）」説では、宮沢賢治は花巻農学校で教鞭をとっていたころ、七五三縄の本体は雲を、七五三縄の細く垂れ下がっている藁・メの子は雨を、シデは雷（稲妻）を表わしている、生徒に教えていました。

雲と雨と雷は、豊作のための不可欠な要素であり、七五三縄は元来、豊作を願って神社に奉納されたとされています。

私が個人的に信仰上、皆様に説いているのは、神様の「神」と垂直の「垂」、「垂れる」と書いて「神垂（シデ）」と説いております。

垂加神道を説かれた山崎闇斎は、「神は垂（しで）るに祈祷（いのり）を以て先と為す冥は加うるに正直を以て本と為す」と言われています。

祈祷（いのり）が大事という教えでございます。その祈りによって冥加・ご神威・ご神徳を戴く。

さて、ご承知の通り、当神社ご祭神は猿田彦大神・天之宇受女命様です。

当神社のご祭神は、伊勢の神宮のご祭神・天照大神と大変ご神縁が深い神様で、古事記・日本書紀の神話にございます「天孫降臨」「天の岩戸開き」を紐解くと、伊勢の神宮のご祭神・天照大神とご神縁が深い神であることが理解できます。

この神話のお話を致しますと、話が長くなりますので、割愛させていただきますが、今はネット社会にて、ご関心のある方はお調べ下さい。

伊勢の神宮が彼の大宮処にお鎮まりになった由緒が書かれた神道五部書の一書『二所皇大神宮御鎮座伝記』という書物があります。

鎌倉時代に書かれた書でございますが、この書物の中の一節に、当神社ご祭神猿田彦大神様のご神徳を称えた一節がございます。

今日、ご参拝の皆様に、ご神縁を以てご参拝いただきましたので、ご披露させていただきます。

「吾は祈る者の上を時に応じ機に従い化生出現し、其の念願成就を導くであろう」と記されております。

何とありがたい神様でありましょうか!!

但し、猿田彦大神さまは、「吾は祈る者の上を」と仰っておられます。

いのりが大事ということです。

今日、皆様にご参拝され、只今からご祈祷をご奉仕致しますが、この祈りが大事であります。

それでは、只今よりご祈祷ご祈願ご奉仕を申し上げます。

威儀を正し、改め正座をお願い申し上げます。

ご神前では二礼二拍手一礼の作法にて、私目神主に合されましてご拝礼いただきます。

(三重県 椿大神社 欄宣)

沖縄県民斯克戦へリ

―遺骨収集で思う事―

小野 日隆

今日は皆様方に「沖縄」のお話をしようと思っています。私は毎年一月の終わりに遺骨収集で沖縄に行き、本島南部の糸満市で奉仕を続けています。沖縄戦は誠に悲惨な戦いでした。昭和二十年四月一日に米軍が本島に上陸以来、六月二十三日に牛島司令官、長参謀長が摩文仁で自決して組織的な戦闘が終結、更に七月二日の米軍の掃討作戦の終了までの間、実に二十万人が亡くなったと言われ、その半数近くが民間人であるというのも、その悲惨さが余計に増す要因です。そして、「鉄の暴風」と例えられた、島の地形が変わるほどの激しい艦砲射撃に晒された島には、まだ三千体とも五千体ともいわれるご遺骨が残されています。そのご遺骨を一体でも多く地上に出してあげて魂をお慰めしたい、の一念で六年前から、修養団が主催するボランティアグループの一員として奉仕を続けています。ここ三年は糸満市の真栄平という地区で作業をしています。ここは糸満市の資料によれ

ば当時疎開できずに村に残留した八百五十人の住人の内、半数以上の四百五十四人が亡くなっています。その真栄平地区にある、アバタガマと呼ばれる洞窟は、戦後、屋敷内や道路、田畑、山野に散在していた身元不明のご遺骨を住民が収集し、収めた、いわば納骨堂のようなものですが、収めたと言っても無造作に放り込まれたような状況であり、時間の経過の中で満足な供養もできないとの地元地区民の声を受けて、ガマの中のご遺骨を地上に出しし、そして摩文仁にある国立沖縄戦没者墓苑にお納めする作業が続けているのです。七十年という時間の経過と、洞窟内の湿気の為に、拾い上げた、掘り上げたご遺骨は手にしたとたんにはらはらと崩れてしまい正に土にかえるという状態の物も多いのですが、一柱でも多くと毎年気持ちを含めて奉仕を続けています。その作業をしながらいつも思う事を皆さんにお話ししようと思います。

皆さんは沖縄といえど何を思い出しますか、何を連想しますか。「南の楽園」「美ら海」「ひめゆりの塔」「サンゴ礁」「戦争」「米軍基地」「オスプレイ」「ソーキそば」「なんくるないさー」。楽しい事、悲しい事、美しい物、美味しい物色んなものが頭に浮かんでくる事でしょう。私は、昭和五十三年に富士山本宮浅間大社から大分県護国神社に帰ってきた翌年に沖縄県護国神社の春季例大祭に奉仕の為伺って以来、何度も沖縄を訪れています。私は、沖縄

といえは浮かんでくるのは一通の電文であります。遺骨収集の作業中もやはりこの電文が浮かんできます。「沖縄県民斯克戦えり」という言葉で有名な、海軍沖縄方面根拠地隊司令官の大田実少将が昭和二十年の六月六日に海軍次官宛てに発信したものでいわゆる「決別電報」と言われるものです。「沖縄県民の実情に關しては、県知事より報告せらるべきも、県には既に通信力なく、三十二軍司令部また通信の余力なしと認めらるるに付き、本職、県知事の依頼を受けたるに非ざれども、現状を看過するに忍びず、これに代わつて緊急御通知申し上げ。」という文章が始まり、戦果報告や応援要請は一切なく、沖縄の人々が生命、財産の全てをなげうっていかんに苦しい戦鬪に協力したか、沖縄県民の献身的姿勢のみを記したその電文の末尾は、「一木一草焦土と化せん 糧食六月一杯を支うるのみなり」という沖縄県民斯克戦えり 県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」と結んでいます。

今はそんな事はありませんが、私が初めて沖縄を訪れた三十七、八年前の沖縄の内地、大和に対する感情は決していいものではありませんでした。大東亜戦争では日本本土を守るための捨て石にされたというような認識が強いようでした。そんな中でも、最後の官選知事島田毅と、この電文で知られる大田実司令官は沖縄県民からは、特別に敬愛されているようです。それはなぜか、二人とも沖縄県民に対して深い思いやりと、愛情を以て接し

ていたからです。島田叡知事は死を覚悟しての赴任以来五か月間一人でも多くの沖縄県民を護る為に奔走、最後は戦局愈々悪化の中、壕の中で自決します。大田実司令官は、沖縄県民の献身的な働きをつぶさに海軍次官に報告します。この電文には決別電報の常套句であります「天皇陛下万歳」も「皇国ノ弥栄ヲ祈ル」などの言葉は一切使われていませんが、沖縄県民の奮闘ぶりがよく伝わり、尚更に島民、県民の方々の御苦労が偲ばれるのです。ひるがえって、今の沖縄はどうでしょうか。国内の米軍基地は、面積で言えば実にその七十四パーセントが沖縄に集中しています。その為沖縄県民の生活は大きな制約を受け、多くの不自由を強いられています。のんびりとおおらかで何処よりも平和を愛する筈の沖縄は、一部の外部の活動家に牛耳られた反基地闘争が表すように、実に不穏な状況にあります。あの悲惨な戦争から七十二年が経った今、「後世」の我々は、どれほどの沖縄の悲惨な過去に対する思いを持ち、心をいたし、「特別の御高配」を実行しているのだろうか。真つ暗なガマの中でひたすら作業をしながら、何時もそう思うのです。

組織的な戦闘が終わったとされる六月二十三日は沖縄慰霊の日とされていますが、恐らくも天皇陛下皇后陛下には、「お慎みの日」として、深く沖縄に思いを致されておられるとお聞きます。今、私たちは、御英霊の尊い犠牲の上に築き上げられた平和な時代にな

生かされています。今の時代が、平和であればあるほどに、豊かであればあるほどに、遠く沖縄に思いを馳せ、七十二年前、大田司令官が「沖縄県民斯く戦えり 県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」と地下壕の中から我々日本人に訴えた「願い」について今一度考えようではありませんか。

（大分県 八坂社 宮司）

黒と白　　く神葬祭における講話く

村井之介

本日の通夜祭の終わりに当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

私は、葬儀をご奉仕する際にも、また葬儀に参列する際にも、必ず心に留めておく言葉というものがございます。

私事ではありますが、私は、平成十七年四月一日より平成二十三年三月三十一日までの六年間、宮内庁掌典職に奉職をしておりました。掌典職という組織は、皇居の中にございます賢所・皇霊殿・神殿を合わせて、宮中三殿という御殿、神嘉殿、山陵において、宮中祭祀を執行する組織でございます。私は、四月一日に任命を受けまして、その二日後の四月三日には、神武天皇祭同皇霊殿御神楽という天皇陛下が御出ましになられる大きな祭事がございます。私は、右も左も分からないまま先輩の後ろに付いて必死にその準備を行っていた思い出がございます。そうしますと、宮中三殿の区域内で幕を張る箇所がございます。

その幕が、黒と白の幕でした。私は、不思議に思いまして、先輩に「何故、紅白幕ではなくて、黒と白の幕なのでしょう？何かお葬式みたいですが……」と尋ねました。そうしましたら、先輩がこうおっしゃいました。「色の世界にも序列があつて、黒と白は両横綱である。黒は、何者にも染まらない強い色、白は全ての色に調和をする色。天皇陛下が御出ましになられる祭事というものは、最重要祭事である。最重要祭事に使用する幕は、黒と白の鯨幕を使用する。今、あなたはお葬式みたいだと言ったが、お葬式が何か縁起の悪いものの様に思っているのなら、それは違う。天皇陛下は、宮中三殿において、常に黒と白の幕をご使用になられる。我々、一般の人間にとつて、黒と白の幕を使用することが許されているのは、葬儀以外ない。葬儀というものは、亡くなられた方にとつての最重要祭事である。まだ、あなたは奉職して一日目であるから、これから先、あなたがこのまま宮中に残るのか、または違う神社や実家の神社に奉職をするのか、それは分からないけれども、神職として神葬祭をご奉仕したり、葬儀に参列をする際は、この事だけは忘れてはいけません。」と、奉職一日目にこの話を聞きました。目から鱗が落ちるとは、この事かと思ひました。色々と諸説はあるかと思いますが、私はこの先輩の言葉を信じています。

また、私の知人から聞いた話です。知人が、数年前にスリランカに旅行に行きまして、

現地のスリランカ人のガイドの方と非常に仲良くなつて色々とお話をしたそうです。そのガイドの方は、三年間日本で働いていたとの事で、日本語も上手で非常に優秀な方だったそうです。そして、旅の終わりに、知人が、そのガイドの方に「日本人の良い所と悪い所を正直に教えてくれませんか？」と聞きました。すると、そのガイドの方は『あなたが日本人だからお世辞を言うわけではありませんが、私は日本人の悪い所が、本当に分からないのです。日本人の良い所は、いくらでも出てきます。まず、礼儀正しい。約束を守る。時間を守る。他の国の人達は、この時間を守ることが、なかなかできません。また、日本人は差別的な目をしません。スリランカの人達は、この肌の色の違いからくる差別的な視線を敏感に察知するが、日本人からは、そのような視線が全く感じられない。そして、最後に、「ガイドさんのおかげで、この旅行が素晴らしい思い出になりました。どうもありがとうございました。」と御礼を言ってくれる。こんな国民は、私の経験上、日本人以外いません。そのような美点の中でも、日本人の最も優れていると感じる事は、日本人は、亡くなった人やご先祖様を大切にしていることです。スリランカは、日本の仏教と違い、小乗仏教であるので、お墓というものがありません。亡くなった方は四十九日を過ぎたら、別の人間に生まれ変わっているのです、お墓がないのです。亡くなったご先祖様達の記念碑

の様なものはありますが、家族がお墓に手を合わせお祈りをするという事がない。自分が、日本で働いていた時、日本人はいつ休んでいるのか？と思いました。朝から晩まで、休日も返上で働いている日本人が、お盆の頃に皆、休暇を取りだした。私は、そこで日本人はバカンスに行くのかと思っていました。皆が、故郷のお墓参りに行っていたと知って、心の底から驚いたのです。しかも、日本人はそれを当たり前のように行っている。経済大国日本は、我々スリランカ人にとって憧れの国です。でも、日本人が、真に世界に発信しなくてはいけないのは、この日本人の精神性の高さですよ。』と言われて目が覚めたと、知人から聞いて、私も目が覚めた思いが致しました。スリランカの方からは、このように日本人が見られていると知り、思わず唖りました。本当に、ありがたいお言葉を頂いた瞬間でした。

この葬儀は、本日の通夜祭、そして明日の葬場祭・帰家祭と二日間ございます。この二日間、ご遺族を始め、皆様の中で、色々と去来する思いが多々あると思います。その思いというものは、もう声を発する事も、動くこともできない亡くなられた方からの、皆様への最後のメッセージだと、私は思っています。そして、この二日間は、ご奉仕をさせて頂く私にとっても、亡くなられた方からの最後の授業であります。私は、大変微力な神職

でございますが、先の言葉を心に籠め、全身全霊で真摯な祈りを捧げ、ご奉仕させて頂き
ます。

本日は、皆様、大変お疲れの所、長い話で恐縮ではございますが、この話をもって、本
日の通夜祭のご挨拶とかえさせて頂いたきます。

本日は、こちらにて失礼を致します。

(北海道 北見神社 権禰宜)

いのり

大竹久雄

本日はご遠路のところようこそご参拝いただきました。

これより皆様方のご祈祷をご奉仕させていただきますが、ご祈祷に先あたり、少しお話しをさせていただきます。

どうぞお楽になさって下さい。（正座から安座への案内）

皆さん//殿内（外拝殿・神楽殿）の周りをご覧下さい。

長押のところに、ギザギザと白い紙が垂れていますね。これを「シデ」といいます。

漢字では、「紙垂」・「四垂」とか、単に「垂」の漢字で「シデ」と読んでおります。

先程、皆様は参拝に先あたり、手水をなされ、参道をお進みになられ、鳥居をくぐられました。鳥居に七五三縄が張られ、七五三縄にシデが垂れていたと思います。

ここからは清浄な神域ですよ、という標としています。

また、隣の祓殿にてお祓いをお受けになれましたが、幣串にシデを束ね、麻苧を結び付け、大麻という祓具にて皆様をお祓い申し上げました。

この大麻は、祓戸の大神の依り代として皆様を祓戸の大神等のご神威を以てお祓い申し上げました。

ご祈祷の後、ご神前お側近く内拝殿にお進みいただき玉串を奉りご拝礼いただきますが、櫛にシデを付けたものを玉串といっております。

皆様の夫々のお心のお祈りをご神前に、皆様ご自身が直接に手向けるわけであります。

また、地鎮祭など、神籬といって、櫛にシデと麻苧を結び付け、神さまをお招きする依り代としています。

そのシデの由来は、日本神話の天石屋戸開きの件。シデの原型とする、白丹寸手・青丹寸手に由来します。

何故このようなギザギザとした形状をしているか？というところ……諸説がございますが、無限のご神威の説と、雷光（稲妻）説があります。

「無限の神威」説は、白い紙を交互に断つことによつて、無限大の神威を一片の紙に象徴している。

「雷光（稲妻）」説では、宮沢賢治は花巻農学校で教鞭をとっていたころ、七五三縄の本体は雲を、七五三縄の細く垂れ下がっている藁・メの子は雨を、シデは雷（稲妻）を表わしている、生徒に教えていました。

雲と雨と雷は、豊作のための不可欠な要素であり、七五三縄は元来、豊作を願って神社に奉納されたとされています。

私が個人的に信仰上、皆様に説いているのは、神様の「神」と垂直の「垂」、「垂れる」と書いて「神垂（シデ）」と説いております。

垂加神道を説かれた山崎闇斎は、「神は垂（しで）るに祈祷（いのり）を以て先と為す冥は加うるに正直を以て本と為す」と言われています。

祈祷（いのり）が大事という教えでございます。その祈りによって冥加・ご神威・ご神徳を戴く。

さて、ご承知の通り、当神社ご祭神は猿田彦大神・天之宇受女命様です。

当神社のご祭神は、伊勢の神宮のご祭神・天照大神と大変ご神縁が深い神様で、古事記・日本書紀の神話にございます「天孫降臨」「天の岩戸開き」を紐解くと、伊勢の神宮のご祭神・天照大神とご神縁が深い神であることが理解できます。

この神話のお話を致しますと、話が長くなりますので、割愛させていただきますが、今はネット社会にて、ご関心のある方はお調べ下さい。

伊勢の神宮が彼の大宮処にお鎮まりになった由緒が書かれた神道五部書の一書『二所皇大神宮御鎮座伝記』という書物があります。

鎌倉時代に書かれた書でございますが、この書物の中の一節に、当神社ご祭神猿田彦大神様のご神徳を称えた一節がございます。

今日、ご参拝の皆様に、ご神縁を以てご参拝いただきましたので、ご披露させていただきます。

「吾は祈る者の上を時に応じ機に従い化生出現し、其の念願成就を導くであろう」と記されております。

何とありがたい神様でありましょうか!!

但し、猿田彦大神さまは、「吾は祈る者の上を」と仰っておられます。

いのりが大事ということです。

今日、皆様にご参拝され、只今からご祈祷をご奉仕致しますが、この祈りが大事であります。

それでは、只今よりご祈祷ご祈願ご奉仕を申し上げます。

威儀を正し、改め正座をお願い申し上げます。

ご神前では二礼二拍手一礼の作法にて、私目神主に合されましてご拝礼いただきます。

(三重県 椿大神社 禰宜)

美しき人

鈴木明子

その家は池の端に建っていました。いつ見ても人が居るようには見え、しかし夜になると明かりがつくのです。

「昔の赤軍派の隠れ家じゃないの。」と娘はいました。何年も何年その状態が続きました。が、ある時突然初老の男性と女性が庭に出て花を植えているのを見ました。

「人が住んでいたんだ。良かった。」と思いました。が少しすると居なくなり、しばらくして急にガヤガヤと黒い服装の人が集まって居るのが見えました。どうもご主人がなくなつたようなのです。

北海道からこちらへ来られた人らしい、引越するらしい、と噂が流れて来ます。夜になると以前のようにひっそりと明かりがつかます。

私はご主人の亡くなった部屋に一人でいるなんてどんなにか辛く悲しいだろう、泣いて

いらつしやるのと違うかしら、と思うと居ても立っても居られなくなり、勇気を出して夕ご飯をもつて訪ねることにしたのです。

知らない人の突然の訪問にもかからわず、彼女は人懐っこい笑顔を浮かべ中にいれてくれ、話をしてくれました。

結婚を申し込まれたが断ったこと、時々会っているうちに彼が癌になったこと、両親を亡くし一人でいる彼を見捨てるに忍びず、つきつきりで看病したこと、兄弟は三人いるらしいが一度も見舞いに来なかったこと、病院代も手術代も全部彼女がだしてあげたこと、「ありがとつ、ありがとつ。」と涙を流しながら彼は亡くなったこと、お葬式代も四十九日の法要も全部、彼女に出させた兄弟たちは

「縁もゆかりも無い人だからこの家から出て行ってくれ。」と追い出そうとしていること、等々彼女は涙を流しながらも、淡々と爽やかに話されるのです。そして「これは恋とか愛ではなく、情です。困っている人を放っておけません。お金はもどつてこないと思います。が、構いません。私一人ぐらいどうかして生きていきます。」と明るく言い切るのです。私は本当に感動しました。こんなに美しい生き方をする人がいるのだ！と思い、思わず「美しい人ですね。あなたは」と言葉ができました。

今、NHKの朝ドラでは「ひよっこ」が放映されています。昭和四十年代、東京オリンピックが開催されたり、集団就職が盛んだった頃の話ですが、お父さんは家族の為に東京へ出稼ぎに行き、家族達は支えあい、励ましあいながら田舎で待っている、昔の日本のどこにでもあった美しい生き方、美しい姿が描かれています。

また小川糸さんが「ツバキ文具店、鎌倉代書屋物語」という小説を書いていまして、ドラマ化されたのですが、そこに描かれている人々も実に美しいのです。自分さえ良ければよいという人は一人もいず、正直で真面目で誠実でやさしく親切と明治維新のころ、外国人に感嘆された日本人が描かれています。

日本人はこんなに優しく暖かく美しい生き方をしてきたのかと思いました。この日本人の美しい生き方を無くしてはいけないと思うのです。

幸い日本には美しい生き方のお手本となられるお方がおられます。

天皇陛下のおそばにあって陛下と共に国民の幸せを祈り、ひたすら陛下をお支え続けた皇后様です。

二年ほど前、ある宮司さんに誘われて皇居勤労奉仕団として皇居の清掃奉仕に行かせて頂きました。その時天皇皇后両陛下、皇太子様からご挨拶を受けることができました。

お姿を拝見すると泣けますよ、と仲間から聞いていたのですが、本当にお姿が見えた途端、涙がワアと勝手に溢れてきました。

陛下のお身体から何とも言えないお優しい慈愛に満ちたオーラが発せられていて、私達百五十名ほど並んでいたのですが、皆をフアアと包んでくださるのです。涙がボロボロ流れました。続いて皇后様のお姿を拝見しますと更に更に涙が出て来まして嗚咽が漏れそうになりました。柔らかな柔らかな白い光のような優しいオーラが全身から輝き出ておられ、春風のように私達を包んでくださるのです。

お声もお優しくくて慈しみに満ちておられます。お出ましになられる前にお付きの方から「具合が悪い方は今言ってください。お出ましになられてから倒れますと、皇后さまはずっとお氣にかけられて、あの方は大丈夫だったでしょうかとお尋ねになれますから。」と言われましたが、あのお優しさならばずっとお氣にかけて下さる事でしょう。

皇后さまのお歌に

かの日訪ひし秋田の里の老の家たつきいかならむ雪がこひのうち

と心配したお歌を詠んでおられます。

又陛下のおそばでお支え続けられた皇后様は、陛下のお誕生日のご兼題で

君が歩み遠くきませり一筋のさやかにつく道とし思ふ
と陛下の歩んで来られた道のご苦勞をしみじみ詠んでおられます。

私達はこんな美しい生き方を学んでいきたいものです。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

神様がまへ、仏様ほつとくな

吉田隆宏

世にある金言・格言の類いはおおよそその場合、そうした方が良い、とかそうあるべきもの、と思われがちです。実際、その殆どがそうなのかもしれませんが、中には、そうではない方が良いという戒めや、逆説的に使われるものもあります。または、本来悪い例としてあげたものののに、長い年月の間に使われ方が変化してしまったり、或いは使い方を間違えてしまい、あたかもそれが良いことのように使われてしまっているものもあるのではないでしょうか。私は私がそう思うものの一例として、『仏ほつとけ、神かまうな』という言葉をあげます。

このことを申しますと、私は日頃一体何をしているのかと自分自身に愛想が尽きてしまうのですが、誠にお恥ずかしい話、神社の元役員さんの中にすら、勇退された途端にこのような事を言って、神社に足を運んで下さらなくなった方もおられます。もちろん、ご本

人に悪意などではなく、半ば冗談で言っている事は分かっております。しかし、それでもこれを言われるとても寂しい気持ちになるのです。

一昔前、日本は天皇中心の神の国と言って退陣に追い込まれた総理大臣がおりました。神社関係の外郭団体への祝辞でしたのに、やれ国民主権に反するだとか、やれ信教の自由を侵しているだとか、憲法違反だとか。一体誰の作った憲法かわかっているのでしょうか。しかしマスコミ各社に揚げ足を取られ、結果的に残念なかたちになってしまいました。今思い返しても悔しくてなりません。なぜなら、特に間違ったことを言ったわけではないからです。

さて皆さん御承知のとおり、我が国には全国津々浦々に到るまで、氏神様のないところはありません。しかし、神と一言で言ってしまうと、キリスト教のように人格のある全知全能のただお一人の神様を思い浮かべてしまうかもしれません。しかし、日本の神様は違うのです。私達日本人は、山には山の神様、海には海の神様が宿っているというように、万物に靈性を見出し、そこに神様の御性格を感じてきたのです。ですから、神とは主に大自然のことを意味します。

日本の伝統的価値観によると『人は神の子孫』であるとされています。先程言いました

ように神とは大自然のことを指しますから、神の子孫とはすなわち『大自然の子孫』であることも意味します。つまり、神様⇨大自然、人⇨神の子孫、∴（ゆえに）人⇨大自然の子孫というように、いつの間にか数学の三段論法みたいなものができあがっちゃいましたね。ところが、この三段論法を成立させるには、『人⇨神の子孫』を証明する必要があります。

そこで『人⇨神の子孫』を言い換えると『人の先祖⇨神』となります。いやいや、ちよつとその前に、人の祖先とは一体なんぞや、となりますが、ダーウィンの進化論では猿です。でもいきなり猿がぽつと空から降って来たわけではありませんので、もっと遡ると全ての命の起源は、地球の海中にはじめて生命が誕生したときにまで遡ることになります。したがって進化論を肯定するならば、人の祖先は、時代を遡るほど大自然に拡散していきます。先程も申しましたように大自然は神でありますから、この価値観によれば、人の祖先は神様であることになります。

一方、進化論を否定するなら、いやいや、人の先祖が猿なわけあるかい、最初から人だったに決まっている、ということになります。この場合、人の起源は科学的にはいまだ不明ですが、神が自らの姿に似せて作ったとされるキリスト教の『創造論』や、日の神の御子が高天原から地上に降り立ったという『古事記』や『日本書紀』が記す天孫降臨が事実であ

るといふ可能性も生じます。もし創造論を採用するなら人を造つたのは神であり、また、天孫降臨説でもいいよい人の祖先は神様であるということになります。

少々理屈っぽくわかりにくい言い回しになってしまいました。が、いずれにいたしまして、人の祖先は神様であり、神様たる大自然でもあると、結論づけることが出来ます。

ですから、神まつりとはいわば自然崇拜でもあり祖先崇拜でもあるというようなことで、神様と人間との関わりも、祖先崇拜の延長といえますか、どこからどこまでが神様で、どこからどこまでが祖先という区別もあります。一筋の繋がった信仰になっているのです。

大日本は神国なり。

我らが遠い遠い祖先はみな則ち八百万の神々であり、私達日本人は、この神々の子孫に当たるのです。つまり血のつながり、連続性です。御先祖の過去を受けての今があり、子孫の未来に向けての今がある。これを神道では中今といいます。だからこそ、この中今を最も大切にしなければなりません。

仏はつとけの仏を御先祖様と解釈したとき、『仏はつとけ、神かまうな』とは、この連続性を持った時の流れの中の中今を否定する言葉なのです。つまり、冒頭に述べたそうあるべきものではなくて、心ない人が言っているだけのことに過ぎず、自分はたった今だけ

の自分で、動かない物、マネキンのようなものだ、と自ら得意気に言っているようなものなのです。

先祖を拝む延長線上に、さらなる先祖に当たる神様たる大自然を畏れ敬ってきた我々日本人は、この我が国を神国と信じ、子々孫々が栄え行く道を日常生活の中に見出し、神の道を興し立てました。これが神道、惟神の道（かんながらのみち）です。そしてこれを宗教的に把握したものが神社なのです。それ故に神社は我々の魂のふるさとであり、また生活の根源であります。

神道には教祖と称するものがありません。他の宗教に見るような教義も教典もありません。ただ日常生活の中に、祖先と大自然を神と仰いで、淨く、明るく、正しく、直く生活して、いよいよ栄え行くようにと自ら神を祀ったものであります。そこに神社神道の本義があると思います。

（北海道 和寒神社 宮司）

神仏習合

小栗雅仁

本日は御奉仕頂きまして有り難う御座います。さて、今回は神仏習合についてお話させて頂きます。

仏教の伝来は六世紀半ば百済の聖王より伝えられたとされ、伝来当初は隣国の神といった認識であったと考えられております。

その後、仏教の教義を広める方法として、神も仏の救済を求めているという「神身離脱説」、神は仏を護る存在であるという「護法善神説」、神と仏は同一であるといった「本地垂迹説」など様々な方法で神仏習合が進み神前で読経をする事も増えていきました。

これらの説は総て仏教側から神社との関わりを求めて始まったと言われており、人々は神も仏も尊い存在として敬ってきました。

鹽竈神社に於いても本殿で祝詞を奏上すると同時に拝殿で僧侶が読経するといった事も

ありました。

この様に習合されてきた時代が千年以上続いて参りました。そして明治政府の政策である大教宣布の詔に先立ち神仏判然令が發布されてより百五十余年りが経ち、現在ではほぼ全ての神社仏閣において神仏が分けられてお祀りされており国民の理解も進んできております。

ここで、神仏合同で行った行事を紹介させて頂きます。当神社で預かっている塩竈市遺族会の事務局の担当をしていたときの事をお話しさせて頂きます。

終戦七十年を迎えるにあたり記念事業として塩竈市の慰霊塔を修復したときのことです。塩竈市の慰霊塔は高さ五メートル、幅八・五メートル程ある凸型で、組石の上に人口石（コンクリート）で作られており、昭和二十八年四月に日清戦争以降の戦没者を慰霊するために建てられた大きな塔であります。

慰霊塔の正面には建設趣旨が当時の塩竈市長名で刻まれており、その上段に掲げられている「慰霊塔」の文字は松島瑞巖寺（延暦寺慈覚大師が第五十三代淳和天皇の詔勅で開創）の住職の三浦承天老師の揮毫であり、凸部の両脇には千百五十四名の戦没者の氏名、裏面に慰霊塔建設協賛会世話人約七十名の氏名が刻まれています。

建設趣旨には「英靈壹千百五十有余柱の遺烈を偲び」と刻まれている処から當時は御英靈を神式でお祀りしていたと考えられ、慰霊塔の揮毫を住職にお願いしているところから、仏教との関係も浅からずあった事が窺えます。

この慰霊塔は永らく修復した様子が無く、平成二十三年の東日本大震災の影響もあり人工石が割れ、組石がずれたり、周りの敷石が割れている状態でした。

修復するにしても遺族会単体では大きな修復は出来ないため、市に協力を得て修復を進めることに決まりました。

慰霊塔の修復は戦後七十年目の八月迄に終えるように計画し市を始め遺族会員や市内の皆様にご協力を頂き、修復実行委員長がお寺の役員をやっている事もあり市内のお寺にもお声がけしたところ、五つの寺から協力をして頂きました。

お陰様で七月二十八日に竣工し、同月三十日に無事、修復記念式典を行うことが出来ました。記念式典は遺族を初め協力頂いた方々をご招待して執行しました。

当初、記念式典は遺族会の事務局が神社にあるということもあり神式で行う予定でしたが、ご遺族の強い希望もあり、協力を頂いた五つの寺と神式での挙行という形をとりました。

記念式典当日は午前十時執行とし、七月の終わりということもあり、参列される方々も高齢の方が多いということを考慮して厳肅かつ長時間にならないよう配慮し、修祓・玉串拝礼・読経・主催者及び来賓挨拶・焼香（流れ解散）としました。

神仏混合で行ったこの記念式典が終わった後に出席者の方から、「いつもは神社さんに（慰霊祭を）やってもらっているが、お経もあげてもらって本当に良かった」といった事を言われました。神と仏は違うものであるという認識はあれども、ご遺族の方にとっては我々日本人が古くより慣れ親しんだ慰霊の形を同時に二つ行った事に大変喜ばれました。

その後、毎年行っている塩竈市関係戦没者慰霊祭には代表となったお寺の住職が参列しております。

今後何かしらの機会があれば合同での行事を行いたいと考えています。

その後、ご遺族の方に聞いた話ですが、同年の十一月に仏教界の各宗派が集まり千鳥ヶ淵戦没者墓苑で法要を行った後に、戦後初めて靖国神社拝殿に昇殿し読経を行いました。その際、今回行った式典を参考にさせて頂いたといったお話を聞きました。

もともと、靖国神社では色々な宗教の方でも分け隔てなくお参りをして頂いており、拝殿で護摩を焚くといった火気の使用はご遠慮頂いているようですが、慰霊を慰める行為に

については受け入れをしており、色々な宗派の方がそれぞれの方法でお祈りをして頂いているので、こういった機会をもとにより多くの方が靖国神社に参拝されることを望みます。

また、神社では神社神道を涵養する事は当然として、神式だけに拘らず世界には多くの宗教や思想があり、お祈りする人々の需要に広く応え心に残るような御奉仕をしていきたいと思えます。

(宮城県 志波彦神社・鹽竈神社 権禰宜)

利他の心

山下 裕嗣

利他の心。我々神職の根本に無ければならない心です。そして、人として社会生活を送るにあたって、心に留め置いて置かねばならない大切な心です。

反対の言葉は利己。自分勝手な、自己中心的ないうものですが、今の世の中、これが当たり前のようになっています。人権教育が小中学校でしっかりと教えられています。しかし、個人の権利は教えても、地域社会としての義務やルールはあいまいで、神社の氏子会の役員なども、敬遠されている現状があります。

戦前、修身が学校で教えられ、教育勅語が人としての基本のルールとして教えられていた時代。人は家族の中にあり、家族は地域社会の中にあり、地域社会は国家の基盤にある。という事がしっかり教えられていました。人は決して一人では生きてはいけなく、地域社会の一員として、国家の一員として存在している事。目に見えない人の力、目に見えない

大自然の摂理、目に見えない神仏の力によって生かされている事が、知らず知らずに教えられていました。

戦後教育において、国家的とか、愛国心とかの精神構造が、敗戦の原因のように扱われ、個人尊重が叫ばれて、いわゆる自虐史観教育で徹底的に教えられる中……もちろん戦時中の必死の努力の中で、個人よりも国家中心で、多くの考え方が虐げられてきた一時期もあった事は否めません……しかし、過ぎたるは及ばざるが如しの言葉の通り。国を愛する心や地域を支える心が失われてしまいました。人々の考え方は自己中心となり、地域社会は利己的な考え方の人の集団となっています。そう言った人々の、地域の集まりでの意見は、「地域のため」のような事を言っているようですが、自分中心の、自分から見た、さらには自分だけの考え方が飛び交い、まとまらない現状があります。

本日のテーマの「利他の心」。利他を辞書で検索しますと利益よりも、他者の利益を優先する考え方」とあります。ここで言う他者の利益とは、他人という個人ではなく、地域社会や国家という公の事を言っているのです。

我が地元、石川県のご出身で、元総理大臣の森喜朗さんは「滅私奉公」を座右の銘としておられました。滅私奉公は、私心（個人としての心）や私情（個人的な思い）を抑えて、

国家・社会・世間などに対して奉仕する精神を意味します。滅私？……自分を捨てて人々のために尽くすなんて出来るのか？……という声もありますが、それくらいの精神を持っていなければ国会議員など務まらないのであります。まあ、森先生の場合はリップサービスが過ぎて、メディアに色々と揚げ足を取られる事も多かったようですが……。この滅私奉公の言葉は森喜朗さん自身の言葉ではなく、そのお父様、元大日本帝国陸軍中佐、石川県根上町町長も務められた森茂喜さんの言葉であります。森喜朗さんの回顧録には、「復員してきた父の言葉でよく覚えて「自己のいるのは、お父さんはお前らのために帰ってきたんじゃない。多くの戦友、多くの部下を死なせた。その人たちのために日本を再建しなきゃならんし、この地域も再興させていかなくてはならん。そのために頑張るんだ」と滅私奉公を言われたそうです。

さて、何やら時局のお話しになってしまいました。が、神道講演に戻しましょう。

利他の心は、日本の神話にも多く見られるものです。有名なお話しの中に蘇民将来伝説というものがあります。今は六月。夏越の大祓いに、茅の輪くぐりをする風習が見られますが、この茅の輪の由来の元にあるお話しです。細かい所は、伝承する地方によって変わってきますが、その起源は「備後国風土記」や「群書類従」にあります。要約してお話しし

ましよう。

昔むかし、天照大御神の弟素戔鳴尊は、姉神の怒りに触れて高天原を追ひ出され、北海に住んで居られました。ある日、暖かな南の海の女神の娘を娶りたいと、旅に出られました。山を越え川を渡り日も暮れて宿を求めておりますと、蘇民将来と巨旦将来という二人の兄弟の住む里にやって参りました。弟の巨旦将来は里で一番裕福な家で、たくさんの家や倉を持っておりましたので、素戔鳴尊は自身を武塔神と名乗って、一夜の宿をお願い致しました。しかしながら巨旦将来は長旅で汚れ、疲れきった尊の姿を見て、家に入れる事は出来ないと断ります。さて、兄の蘇民将来は、真に粗末な小屋に住んでおりました。弟の巨旦に断られた素戔鳴尊は、やはり武塔神を名乗り、その蘇民将来のあばら家を訪ねます。蘇民将来は、武塔神が大変疲れて、困っているであろうと、家に招き入れ、柔らかな粟のワラで床をしつらえ、粟飯を作って、おもてなし致しました。

さて、数年経って、素戔鳴尊は八柱の御子神を伴ってこの里を訪れ、蘇民将来の家を訪ねます。武塔神は私、素戔鳴尊であった事を告げ、「将来もしこの里に疫病が流行つたら、自分は蘇民将来の子孫であるとして、茅の輪を腰に着けていれば免れる」とだけ言い残して去って行きます。その後、この里に疫病が流行った時、弟の巨旦将来の家は滅び、兄の

蘇民将来の家は末代まで栄えました。という伝説であります。夏越の大祓の茅の輪はもとより、伊勢の地では「蘇民将来子孫家門」と書かれた札を下げた注連縄を、年中家の門口に下げております。

まさにこの蘇民将来の心は利他の心であります。貧しい家であり、人をもてなす余裕など無いであろう、蘇民将来の家ですが、それ以上に長旅の疲れで、困り果てた素戔鳴尊の立場に立って招き入れ、柔らかい床と食事を準備します。自身の心を他の人の心に置き換え、自分を外から見て行動を起こす事が、家庭や地域社会に求められているのであります。

この神話の前には、素戔鳴尊が自身の荒ぶる行いによって、高天原を追われるお話があり、さらには天照大御神の天岩戸隠れの神話があります。この世の中に、分け隔て無く光を与えて頂ける天照大御神の御心も、まさに利他の心でありましょう。個人主義や利己的な考えの人が、この世の中にあふれ始めている今は、天照大御神の天岩戸隠れに繋がりを、闇の世の中が始まるうとしています。そうなる前に、一人一人が「利他の心」を思い起こして、世のため人のためになれます事をお祈り申し上げて結びと致します。

八月十五日

宮崎 貞臣

今年の夏は、猛暑と云われております。

人間は、自然の中で生きて生かされていることをすぐ忘れてしまいます。

人は生かされて、そして、命あるものには必ず終わりがある。この世に、今生きていること自体が奇跡であり、神様の恵みであり同時に祖先がいなかったら、自分自身がこの世に存在すらしていなかったのです。

昨年より参加させていただいております。

若輩もので、ございますが宜しくお願い申し上げます。

今回の演題には、日本で一番熱い夏、「八月十五日」を選らばさせていただきました。

映画や小説等にもなり、知らない人はいない日本の一番長い一日。八月十五日。

母方、祖父幡掛正浩（前神宮少宮司）の人生は、敬愛する先輩・同志・畏友との出会いで、素晴らしい生涯を終えている。

京都帝国大学時代よりの有志、北原勝雄先生（鈴木貫太郎首相を救い出した本人）は、もともと八月十五日のことを発表する意思はなかった。しかし、記憶がなくならないうちに三十七年経過して書き残しておくのも私の務めではないかとおもわれた。

北原勝雄先生は、当時首相の秘書役であった四元義隆さん（本が出ていたので説明は省略します）の意向に従い、八月に入って学生四名（石井醇一郎、所賀尚雄、長松幹栄、岩崎昭太の諸君）を率いて首相官邸に詰め、首相の身边を警護することとなったのである。

「追水（さこみず）さん、今夜陸軍が蜂起しますよ」

首相官邸書記官室長で、ばったり出会った追水内閣書記官長に私は言った。閣議の終わるのを待って鈴木貫太郎首相と一緒に私が文京区丸山町の首相私邸に帰ろうとした際である。すでに十五日午前零時を過ぎていた。

終戦の閣議に参加し、玉音放送などの段取りをつけ憔悴しきった追水さんは、一瞬ぎよつとした。

「そうか、ひとりでは心もとない。首相と帰らずここに泊ってくれないか」

「泊まりましょう、そのかわり明朝4時丸山の私邸まで車を出してくれますか」

「わかった、必ず手配する」

この約束のもとに、そのまま私は官邸にとどまった。

追水さんとの約束どおり官邸に泊ったが、寝たのは一時を過ぎていた。当時官邸には私の他石井、所賀の両君がいた。

すぐさま、首相私邸に向かおうとし二人を連れ先夜約束の自動車を探した。運転手を呼んでも応答がなく、車の所在もわからないので、警視庁で車を借りようと思った。

官邸の裏門を抜けたところで、議事堂の方から葡萄前進してくる佐々木大尉（のちに大山量士と称し亜細亜友の会を主宰）の率いる襲撃隊とであった。兵にまじって学生姿がみられる。佐々木大尉が横浜工専出身であったから恐らく同校の学生達が加わっていたのであろう。

「よそ見をせず真直ぐ歩いてついて来い」

私は声を抑えて二人に指示した。互いの距離は段々近づく。しかし、首相官邸の方向にすべての神経を集中していた一隊は、私達に気付かなかった。すれ違って間もなく、彼等

は機関銃で官邸を掃射しはじめた。

そのすさまじい銃声を背に警視庁に飛び込んだ。

「俺は内閣のものだ、藤田（二郎）課長はいるか」怒鳴る様に尋ねた。

飛び出してきた警部に「官邸が襲撃された、車をだしてくれ」と頼む。

警視庁の対応は素早かった。直ちにオーブンカーそれもガソリン車を用意してくれた。

「鈴木首相の私邸へ」

幸いなことに運転手が首相私邸を知っていて私たち三人を乗せ直ちに走りだした。ところがいくらかもたない時である。

「止まれ！」前方に剣付鉄砲の兵士が立ちはだかった。二重橋前である。

「内閣の者だ、通せ」私は強引に突破を試みた。

「通さぬ」銃先を車に突き入れてきた。兵士達の眼は充血し将校もピストルを構えて飛んでくる。

「右へ廻れ！」大きな私の声にひるんだ将校が兵を制し道をあけさせた。間髪を入れず車は発進し、一路私邸へと走った。

あとからわかったことだが、私達を二重橋前で制止した兵士達こそ近衛師団叛乱部隊で

あった。

首相私邸に近づいた時、官邸を襲撃した佐々木一隊がトラック二台に分乗して、私達の前方を走っているではないか。

「先生、さっきの連中がいます。」

所賀君が声を殺して合図した。

「右へ」と指示、私達は別の近道を通り全速力で襲撃隊よりひと足先に私邸に着いた。

あたりはまだ薄暗かったが官邸を出てから小一時間ほど経っていたと思う。

車から飛びおり土足のまま玄関から奥へと走った。総理が上衣のボタンをかけながら小走りに出てこられるのに出会った。うしろに夫人、長男の一さん(当時首相秘書官)が続く。

「総理こちらです」首相の腕を抱えるようにして玄関を出て門の方に走った。

私邸の門は電車が走る大通りに対し斜めに構えた造りであった。しかも首相専用車が電車で通りでなく、そこから私邸の門前を駒込方向に対し左折した小路に入って駐車していたことが幸いした。そのため、私達が乗付けたオープンカーのすぐ数十メートルほどの後方には佐々木大尉一隊の車が接近していたにもかかわらず、総理と私どもが正門を出てすぐ左折し、その小路に止めてあった首相専用車に乗り込む姿が襲撃隊の視野にはいらなかった。

たのである。

首相専用車は小路を右へ右へと曲がり、大通りに出て東大正門前の首相親戚の邸へと脱出した。この時のきわどいすれ違いの状況を鈴木さんは次のように記している。

「……同車したものは、父総理と母秘書官の私に、同じく秘書官であった従兄の武君（首相実弟鈴木孝雄陸軍大将の子息＝北原）と唐沢運転手の隣りには警備の警視庁の坪井さん、それに急を聞いて駆けつけた北原さんの七名であった。総理の自動車は電車通りから小路に入ったまま駐車してあったのであるが、いざ乗ってみると中々エンジンがかからない。戦争末期でよいガソリンがないための当然の現象であるが、そこ迄襲撃部隊が来ていると思うと、気が気でない。警備の警察官十人程で車の後押しをやってくれたが、後刻色々計算してみると、実はこの頃、兵隊と学生を乗せた佐々木大尉の率いるトラック二台は、既に電車通りを走ってきていたらしい。

一隊は、小さい総理私邸の前を通り越して、坂上の千葉三郎氏の大きな邸宅を目指して進み、ここで尋ねて逆もどりしたのであった。

その頃総理の自動車は、同じ電車通りを反対方向に、一目散に本郷西片町の叔母の家に走っていたのである。まことに運命のすれ違いというか、危機一髪の間であった。

親戚の邸に着いてから一さんが丸山町の私邸に電話を入れた。ところが電話口に襲撃隊の兵士が出て「鈴木はどこにいるか」と怒鳴るので一言もしゃべらず電話を切っている。

そのあと、彼等は私邸に火を放った。一種の焙り出し作戦をとったであろうが、すでに首相は脱出したあとだった。

そうした情勢から、ここ西片町も危険だと判断、こんどは芝にある朝香宮邸に鈴木孝夫大將が寄まんしておられたのでそこへ一行は移動した。ところが、この邸の玄関に飛び込んだ私の目の前に姿を見せたのが、なんと小田村寅二郎君ではないか。

これには驚いた。機先を制して声をかけた。

「君は戦争終結に反対か」

「いや、戦争終結は已むをえないと思う。」

そうしたやりとりのあと無事に一行は邸に入り、午前十一時過ぎまでここにいた。

その後内閣と連絡がつき、襲撃隊及び近衛師団の叛乱が鎮まったとの報せを聞き、首相官邸に総理ともども入ったのは確か十一時三十分頃であった。首相私邸から脱出して以来およそ6時間半というもの、全く内閣と連絡がとれなかったのである。

ところで、石井・所賀の両君は、首相私邸で私がオープンカーを降り首相一行と脱出した時、あとを追ったようであるが燃料が切れ、已むなく駒込駅前で車を捨て直ちに吉祥寺に戻り四元義隆さんに脱出成功を報告している。

その後当日の炎天下、松岡・石井の二人は私達を探して都内の心当りを終日尋ね廻ったようだが、恐らく、首相脱出後の経路は誰もが予想できなかったところであろう。

脱出成功の安堵感も手伝ってか、私は官邸に着いてからは大広間でぐっすり眠り込んでしまった。そのため、正午の玉音放送など全然知らずに過ごしたのである。死を覚悟していた私であったが、めまぐるしい動きのあとに訪れたものは意外にも深い眠りであった。

もしも、「玉音放送」「鈴木貫太郎首相暗殺」がおきていたのであれば：日本本土が戦場になっていたのであれば：

その時の本当の真実を知る先生達がお亡くなりになっていく昨今、語り伝えていく責務が我々にはあると思います。

北海道百五十年を迎えて

角 田 秀 昭

北海道神宮に正式参拝をして頂き有難うございます。北海道神宮は、明治天皇様の北海道開拓への格別の思し召しにより、北海道の守護神として開拓民の心の拠り所として、御祭神が定められました。二年後の平成三十一年には御鎮齋百五十周年を迎えます。

明治二年九月一日に北海道の国土の神として大国魂神、大那牟遲神、少彦名神の三柱の神を開拓三神と称して御祀りされたのが始まりですが、明治四年五月十四日に「札幌神社」と社名が定められ、昭和三十九年には北海道開拓の第一功績者であります明治天皇が祀られ、社名を北海道神宮と改称し、名実ともに北海道総鎮守として崇敬され、今日に至っております。東北以北では唯一の神宮名称です。

当神宮の地政学的な特色をご紹介させて頂きますと、毎朝日供の祝詞に「国後・択捉・歯舞・色丹の四島は一日も速やけく祖国復帰を得叶へさせ給へ」と北方領土返還祈願詞を

奏上しております。

先程、明治天皇様は北海道開拓の第一功績者と申し上げましたが、開拓使時代の予算は、当時の国家財政の四〇五％、多いときには七％を超える年もありました。今で云う地方交付税の七％でも他県から不満のクレームがつきそうですが国家予算の七％です。明治天皇様の格別の思し召しの表れといってもいいかと思います。しかしながら、その御恩を忘れてしまったような事例が起きました。

北海道はかつて蝦夷地と呼ばれていましたが、松浦武四郎が蝦夷地に代わる名称として「北加伊道^{カイ}」を含む六つの候補を、明治二年七月十七日に明治政府へ提案し、同年八月十五日、「蝦夷地、自今、北海道ト被称」の太政官布告によって「北海道」と命名され、八月十五日を「北海道の日」として、道庁主催の記念行事も周年毎に催行されて来ました。加伊^{カイ}というアイヌの言葉には「この地で生まれたもの」という意味があり、当時はアイヌの人達にも喜ばれ、アイヌ人と日本人の和合の命名として誕生しました。

北海道議会は北海道百五十年を祝うため、七月十七日を「北海道の日」に制定しようとなりました。アイヌ民族に配慮したとされるこの条例案は、例えて云えば、道職員が提出した条例案が道議会で可決承認されたが、可決された日を制定日とせず、提出した日を制定

日とすることであり、まるでプロポーズした日を結婚記念日にするのと同様の可笑しさがあります。その歴史的史実の連続性からしても「北海道の日」制定に最も相応しい日は、八月十五日であります。今更何をというのが実感です。

抑もアイヌ民族は本当に先住民族なのか？その結論は考古学や遺伝子の研究の成果によるものと思われがちですが、実は「国会決議」にあります。考古学や遺伝子の研究の成果では、異なる推論が導き出されております。学問の自由が「国会決議」によって封印され、閉ざされた言語空間となっています。日本人の集団の成り立ちを説明するときに、根強い理論として「二重構造説」があります。縄文人社会に大陸から渡来人がやって来て混血を繰り返しながら全国に広がることで本州四国九州の本土日本人が形成され、北海道や沖縄では混血の影響が少なく縄文人の直系の子孫が残ったという考え方です。このままでは、アメリカ大陸のインディアンやオーストラリア大陸のアボリジニに対する白人の弾圧と和人によるアイヌ民族への迫害を同一に扱うという、悪意の印象操作が定着してしまうのではないかと憂慮しております。

しかし、DNA分析により近世のアイヌ人が、ロシア沿海地方にルーツを持つオホーツク文化人から影響を受け、シベリアの先住民とも遺伝的な関係があることも分かっています。

した。ヨーロッパ各国の博物館にアイヌ人の遺骨が収集されているのは、アイヌ人白人説の研究対象とされたからだともいわれます。北海道内で発掘された、七千年前の世界最古の漆器類を作り使用していた縄文人達はどこへいったのか。ユーカラに伝わるアイヌ人が制圧したというコロボツクル人はどこに消えてしまったのか。最近のDNA分析によりまずと、アイヌ人や琉球人や古代朝鮮人の先祖は、本土日本人と共通の縄文人だとされております。

この歴史の改竄をもくろむ、この条例案に神政連役員の皆さんと意見書を道議会に提出したところ、三月の道議会で「七月十七日を北海道みんなの日」という名称に変更しての制定となりました。みんなから認められなかったので「みんな」をいれたようであります。又、当初七月十七日を「命名の日」として喧伝されていましたが、最近「提出された日」と正しく公報されるようになりました。辛うじて明治天皇様ご裁可の權威ある太政官布告「八月十五日は北海道の日」を残すことが出来たと喜んでおります。いつの日か、「八月十五日は北海道の日」と五百四十万道民に周知されるよう努力して参りたいと思います。

(北海道 北海道神宮 欄宜)

うまし国日本の理想

井 出 舜

わが国は神のすゑなり神まつる

昔のてぶり忘るなよゆめ

本年は皇紀二千六百七十七年。私たち日本国民は、建国以来連綿と受継がれた大御代の歴史の上を歩んでおります。今上天皇は百二十五代、人類史上奇蹟であります。

日本はすばらしい神の国。しかし、敗戦以来、わが国民の心の中に、神国の信仰が生きているでしょうか。憂慮にたえない事象がまた見うけられます。国家とともに御活躍された、生粋の明治生まれの人びとが少なくなり、戦後生まれが過半数を占めてきました。

国のため、世のため、人のために尽くす心。

した。ヨーロッパ各国の博物館にアイヌ人の遺骨が収集されているのは、アイヌ人白人説の研究対象とされたからだともいわれます。北海道内で発掘された、七千年前の世界最古の漆器類を作り使用していた縄文人達はどこへいったのか。ユーカラに伝わるアイヌ人が制圧したというコロポクトル人はどこに消えてしまったのか。最近のDNA分析によりまずと、アイヌ人や琉球人や古代朝鮮人の先祖は、本土日本人と共通の縄文人だとされています。

この歴史の改竄をもくろむ、この条例案に神政連役員の皆さんと意見書を道議会に提出したところ、三月の道議会で「七月十七日を北海道みんなの日」という名称に変更しての制定となりました。みんなから認められなかったので「みんな」をいれたようであります。又、当初七月十七日を「命名の日」として喧伝されていましたが、最近「提出された日」と正しく公報されるようになりました。辛うじて明治天皇様ご裁可の権威ある太政官布告「八月十五日は北海道の日」を残すことが出来たと喜んでおります。いつの日か、「八月十五日は北海道の日」と五百四十万道民に周知されるよう努力して参りたいと思います。

（北海道 北海道神宮 榎宜）

うまし国日本の理想

井 出 舜

わが国は神のすゑなり神まつる

昔のてぶり忘るなよゆめ

本年は皇紀二千六百七十七年。私たち日本国民は、建国以来連綿と受継がれた大御代の歴史の上を歩んでおります。今上天皇は百二十五代、人類史上奇蹟であります。

日本はすばらしい神の国。しかし、敗戦以来、わが国民の心の中に、神国の信仰が生きているでしょうか。憂慮にたえない事象がまた見うけられます。国家とともに御活躍された、生粋の明治生まれの人びとが少なくなり、戦後生まれが過半数を占めてきました。国のため、世のため、人のために尽くす心。

美わしい国のすぐれた伝統を守ろうとする心が今の世相には薄れているように感じます。

我が国は経済的には世界の首位となり、そのすさまじい勢いの影には、アメリカとギスギスと今や経済摩擦が生じ、これからも日本の行先に不安を投げかけております。

特に、天照皇大神様がお授けになられた命の根「イネ」。お米の輸入の自由化問題は、国民の生存と日本文化の根幹を揺るがす重大課題となりつつあります。わが国は、イネづくりを中心とする農業によって育まれて来ましたが、いまでは高度の工業国と変わり、農業にいそしむ農業の人口は、全人口の一割弱となつてしまいました。稲作を中心に成立してきた村落が崩壊しようとしております。

人々は都会に集中し、過疎になやむ農村の神社は、人影も乏しく朽ち果てようとしています。

うさぎ追いし彼の山

こぶな釣りし彼の川

夢は今もめぐりて

忘れがたきふるさと

故郷への郷愁ほど、心にのこり、懐かしいものではありません。盆祭りや正月になると、日頃忙しさに追いまくられ、身も心もやつれた都会暮らしの人々が、蟻地獄のような規制ラッシュの中を、われ先にと故郷に帰ってきます。この年中行事と化した社会現象は、いたいなんなんでしょうか。これは、産土の地（ち）、父母の血（ち）を分けたいたいた日本人を、故郷と祖先との切っても切れない「命の糸」が呼び寄せているのではないでしようか。よい国、よい国民、よい家庭、美しい自然、肥沃な大地、恵み多い海。わが国ほど、神々がお生みになった「うまし国」とよぶのに、ふさわしい国はありません。

四季折々の季節がめぐり、おだやかな春の光を浴びて、若菜を摘む乙女……。万葉人が歌によんだ、情緒豊かな日本。

天地の神にぞいのる朝なぎの

海のごとくに波たたぬ世を

わが神ながらの大道に生きて、日の大神の大御恵みを、かたじけなく思う日々であります。すばらしい天皇様をいただき、この国に生き受けた「みたみわれ」らは、本当に幸せであります。

本年は「教育勅語」渙発百五十六年となります。今上陛下百二十五代に等く、民族の指針復活を促すよき時機と思います。

「朕惟フニ、我ガ皇祖皇宗、国ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。」

終戦前までは、全国民がこぞって奉讀しました。しかし、ひとたび戦いに破れて、異民族に占領統治されるや、占領軍の圧力に屈して、すばらしい御教えを、見むきもしなくなりました。やはり本来の日本民族の国民道徳の基本を回復し、大切な子供たちの教育を正常化するためにも、是非とも教育勅語の精神を蘇えらせたいと思います。そこで、教育勅語を平易な文章に直して、ここにかかげます。

私は、私達のご先祖が、遠大な理想のもとに、道義国家の実現をめざして、日本の国をお肇になったものと信じます。そして、国民は忠孝両全の道を全うして、全国民が心を合わせて努力した結果、こんにちに至る迄、美事な成果をあげてまいりました。これは、もとより日本のすぐれた国柄の賜物でありますが、教育の根本もまた、道義立国の達成にあると信じます。国民の皆さんは、子は親に教養をつくし、兄弟、姉妹はたがいに力を合せて助け合い、夫婦は仲むつかしく解け合い、友人は心の中を開いて、信じあい、そして

自分の言動をつつしみ、すべての人々に愛の手をさしのべ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格をみがき、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態が発生した場合は、真心をささげて、国の平和と安全とに奉仕しなければなりません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然のつとめであるばかりでなく、また、私達の祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的な美風を、さらにいつそう明らかにすることでもあります。このような国民の歩むべき道は、祖先の教訓として、私達子孫が守らなければならないところであるとともに、このおしえは、昔も今も変わらぬ正しい道であり、また日本ばかりでなく、外国に行っても、まちがいのない道であります。私は国民の皆さんの先頭に立って、皆さんとともに、父母の御教えをしつかりと胸に抱いて実践いたします。一人のこらず立派な日本人となって、幸福をとにもすることを、心から念願いたします。

明治二十三年十月三十日

御名 御爾

諏訪神社宮司

(長野県 諏訪神社 宮司)

国家神道は世界最強宗教だ

菅原隆志

本日は神道会の合同慰霊祭に大勢の方がご参列下さいまして誠に有難うございます。

今回は、「国家神道は世界最強宗教だ」という大変大それた演題でお話したいと思えます。

皆さんは国家神道と言う言葉を聞いて、どう感じますでしょうか。

私の場合は、この「国家神道」と言う言葉を聞くと、何やら暗い感じがします。

それは戦後のGHQの政策、まあ神道指令と言いますが、そういった政策や、また日本共産党、日教組の学校での教育によって、国家神道は軍国主義に至り、アジア各国を侵略戦争して大変悪いことをした。また教育勅語のような教育が悪かったのだと、そう洗脳されてきました。

また一方では、国家神道は国家の宗祀であって宗教では無いという政府の見解も聞いて

きました。

ですから、「国家神道は世界最強宗教だ」という言葉、これは一昨年、札幌護国神社にて青年神職の研修会がありまして、私もその研修会に参加しました。講師の先生は札幌在住の雪氷学者で、近年帝国政府声明文を発掘した安濃豊博士です。この方のお話を聞いて、「まさか!」と思いました。

それでは先生のお話しに沿って、皆さんにご説明したいと思います。

さて皆さん、インド植民地は何という宗教かご存知ですか?

大半はヒンズー教徒で、まあ一部イスラム教徒、シーク教徒、また仏教徒もいますね。

そこは誰に、どの宗教に植民地にされたのですか?

イギリスのキリスト教徒ですよ。調べてみると、イギリス領インド帝国、そう言った名前で呼ばれていると思います。

では次に、ベトナム、ラオス、カンボジアです。これらの地域はフランスに植民地にされておりました。この地域の宗教は、何の宗教ですか?

「村井さん!」そう仏教ですよ。しかしその仏教もキリスト教徒によって植民地にされた。

ビルマはと言うと、やっぱり仏教徒でイギリスのキリスト教徒によって植民地にされた。インドネシアはイスラム教徒でオランダに植民地にされ、マレーはイスラム教徒でイギリスの植民地にされた。いずれもキリスト教徒ですよね。

フィリピン、私も行ったことがありますけれども、フィリピンはスペインの植民地にされて、アジアでは珍しいのですが、カトリックが国教、国の宗教になっております。

私は二十代の頃から、メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマと中米諸国を一人で、まあだいたい五年の間、遺跡を巡り野生動物の調査をしていましたけれども、その国は、ほとんどがカトリック、キリスト教徒で言語もスペイン語ですね。そう言ったところはフィリピンも似ていると思います。このフィリピンはスペインの植民地でしたが、その後スペインとアメリカの戦争、米西戦争と言われますが、それに勝ったアメリカによって植民地にされました。

白人キリスト教、カトリック、イギリス国教会が、イスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒をすべて植民地化し奴隷化してしまった。しかもそれは、約三五〇年も続いた。

奴隷にされたイスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒を奴隷から解放した宗教は、どこの国の何という宗教ですか？

もうお解りでしょう。国家神道が世界最強宗教である理由がここにあるのです。

神道の信者たちが、伊達や酔狂で天皇陛下万歳と言って玉砕して逝ったのでは無いのです！伊達や酔狂で天皇陛下万歳と言って特攻して逝ったのでは無いのです！

宗教という側面から見たときに、大東亜戦争というのは、国家神道が、我が国体、我が天皇陛下とその赤子が、神社を信奉しながら、世界のイスラム教徒、ヒンズー教徒、仏教徒をすべて白人キリスト教徒から解放したという事実です。

このために、我々日本人は三二〇万人という犠牲を払った。しかし、それによって何十億人という虐げられた他宗教の人々が救われたのです。この所を、皆さん覚えて欲しい。国家神道が他宗教の奴隷を解放したということです。

出征する兵士は、必ず神社にお参りしました。そして出征して行った。そうですね。そして、靖国に還ってきた。全国の護国神社にも還ってきた。

私は皆さんに今日これを言いたかった。この国家神道こそが世界の虐げられた宗教をすべて解放したということを、皆さんに忘れてほしくありません。

そして教育勅語によって教育された兵隊たちは、皆さんのご兄弟にも、親戚、叔父さんたちにも居ると思います。

アジアは、白人植民地から解放されたのです。そしてその波は、世界の人種平等を実現した。その教育、教育勅語が悪いわけ無いじゃないですか。

軍国主義が悪いというけれども、日本は鎌倉時代から武家政治、軍国主義ではないですか。東条内閣が独裁主義というけれども、内閣総辞職する独裁者がどこの国にいるのですか？

此の事を、皆さんの周りの方々にも伝えてほしい。戦争に行った方、またご遺族に伝えてほしい。そして誇りを取り戻してほしい。

本日は拙い講演を聴いていただき、誠に有難うございました。

(北海道 琴似神社 欄宜)

女性宮家創設より旧皇族の皇籍復歸を

石 塚 智 康

天皇陛下の退位特例法が六月九日参議院本会議で可決成立しました。

明治二十二年に終身在位制度になって初めての退位が決まりました。これに伴い元号も変わるようになります。

奇しくもこの日、私は天皇皇后両陛下の御会釈を賜り、鳥取県皇居勤労奉仕団団長として、両陛下のご下問にご奉答申し上げていました。

両陛下とも穏かくにこやかにご下問くださいました。有難かったです。

今回政府は天皇陛下の退位と言っていますが、これは退くのではなく、天皇の御身位をお譲りになられる譲位が正しいと思われます。

これまで譲位された天皇は五十八人居られます。この他に南北朝時代の二つの皇統が並

立した北朝の五人を加えると六十三人になります。

初めて譲位されたのは第三十五代皇極天皇様で、大化の改新で孝徳天皇様に譲位。第四十一代持統天皇様からは生前譲位はほぼ定例化されてきて、最後に譲位されたのは第一一九代光格天皇様で文化十四年三月二十一日（一八一七）四十五歳の時十七歳の息子仁孝天皇様に剣爾渡御が行われています。まさに二百年前のことです。

この後院政を執られて七十歳で崩御なされました。

この光格天皇様は今上天皇様から直系で最大限遡れること六代前に閑院宮家からお出になられた天皇です。

この後明治二十二年に定められた「旧皇室典範」で天皇は終身在位となりました。

理由は ① 強制的恣意的な譲位がある得る

② 譲位後の上皇との間で権力権威の二重構造が発生することを防ぐ

③ 譲位後に実権を振るう「院政」に弊害があることの三点から終身在位になりました。

今回の「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に付帯決議が付いています。法律施工後、女性宮家創設に向けて速やかな検討を政府に求めるとなっています。

また女性宮家創設が出てきました。

この女性宮家創設は絶対に阻止すべきです。

それは、萬世一系男系男子で続いている皇統に将来女系天皇を即位させることになる危険性があります。

平成二十四年十月当時の羽田宮内庁長官が、民主党政権下、野田総理に「女性皇族の方は婚姻で皇室を離れるが、皇室活動の安定性から『女性宮家創設』を進言したことにより、この創設の往く先を教わり、民主党はこれをどうしても採りたいのです。そして将来皇室排除に向かおうとしています。

自分の国籍がどこになつていいのか解らない外国から来た当主に、紀元二千六百七十七年続いている皇室を排除されたくはありません。

先ず「宮家」とは皇位継承権を有する者を当主とする皇族ご一家のことを意味しています。

皇室は天皇を中心とする一代家族ですが、宮家の創設は、皇位継承の有資格者を確保するために置かれたものです。

立した北朝の五人を加えると六十三人になります。

初めて譲位されたのは第三十五代皇極天皇様で、大化の改新で孝徳天皇様に譲位。第四十一代持統天皇様からは生前譲位はほぼ定例化されてきて、最後に譲位されたのは第一一九代光格天皇様で文化十四年三月二十一日（一八一七）四十五歳の時十七歳の息子仁孝天皇様に剣爾渡御が行われています。まさに二百年前のことです。

この後院政を執られて七十歳で崩御なされました。

この光格天皇様は今上天皇様から直系で最大限遡れること六代前に閑院宮家からお出になられた天皇です。

この後明治二十二年に定められた「旧皇室典範」で天皇は終身在位となりました。

理由は ① 強制的恣意的な譲位がある得る

② 譲位後の上皇との間で権力権威の二重構造が発生することを防ぐ

③ 譲位後に実権を振るう「院政」に弊害があることの三点から終身在位になりました。

今回の「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に付帯決議が付いています。法律施工後、女性宮家創設に向けて速やかな検討を政府に求めるとなっています。

また女性宮家創設が出てきました。

この女性宮家創設は絶対に阻止すべきです。

それは、萬世一系男系男子で続いている皇統に将来女系天皇を即位させることになる危険性があります。

平成二十四年十月当時の羽田宮内庁長官が、民主党政権下、野田総理に「女性皇族の方は婚姻で皇室を離れるが、皇室活動の安定性から『女性宮家創設』を進言したことにより、この創設の往く先を教わり、民主党はこれをどうしても採りたいのです。そして将来皇室排除に向かおうとしています。

自分の国籍がどこにどうなっているのか解らない外国から来た当主に、紀元二千六百七十七年続いている皇室を排除されたくはありません。

先ず「宮家」とは皇位継承権を有する者を当主とする皇族ご一家のことを意味しています。

皇室は天皇を中心とする一代家族であります。宮家の創設は、皇位継承の有資格者を確保するために置かれたものです。

別の見方からは血統、血の伴走者であり、継承であります。

端的に言えば、いざという時に天皇を出す役割を担った家のことです。

これまで側室制度があった時代でも皇統の危機がありました。が、世襲親王家、宮家から天皇を出して今日まで百二十五代に亘り男系に因る天皇を継承してこられました。

女性宮家創設には必ず皇位継承が付いて回ります。

それはどう遡ってみても皇族と全く関係のない民間の男子を、また目の色や肌の色など一見して明らかに異なる外国の男子を国際結婚と称して婿に入れて良いか。

入れた場合次のような重大な困難な問題が起こります。

① 入ってきた男子を即皇族とするか否か

仮に皇族とした場合この婿さんの呼び名と敬称をどうするか

② 更に生まれた子供の身分はどうなるか

皇族とする場合、皇位継承権を付与するか否か

もし皇位を与えるならば、神武天皇以来一貫して続いてきた萬世一系が崩れるのです。歴史上初めて女系天皇になるのです。絶対許せません。

戦前までは十四宮家がありました。が、昭和二十二年十月GHQは昭和天皇の弟宮三宮の

み残して十一宮家を皇室の財産上のためとの理由で強制的に皇籍臣下させました。

これにより当時の宮内府次長から「万が一にも皇位を継ぐ時が来るかもしれない御自覚の下で身をお慎みになって頂きたい」とのお願いをされて居ます。

旧皇族の方はこの言葉を重く受け止められて居られ、竹田恒泰氏はこう書いておられます。

旧皇族の覚悟として

「女性宮家」についてはほぼ全員が違和感を持っています。そして皇統の安定的維持ということについて、皆真剣に捉えており、皇位は伝統に則り男系により継承されるべきと考えています。またいざ皇籍復帰を求められる可能性もあるときには、それなりの責任を果たす覚悟をしている方も沢山居ます。私の調べた限りでは、旧皇族の一族には四つの宮家に未婚の男子が九人居ます。そのうち悠仁親王殿下に年齢の近い未成年が四人居ます。結婚した若い夫婦も数組居ますので子供さんが生まれるのではないかと期待しています。と書いていらつしやいます。

また、三笠宮彬子女王殿下は新聞インタビューで「いまの議論は女性宮家を創設するか、しないかのみになっていて違和感があります。男系で続いている旧皇族にお戻りいただく

とか、現在ある宮家を養子として継承していただくとか選択肢があると思います」と答えていらつしやいます。

ここに正しい答えがあると思います。

G H Qによつて強制的に臣籍降下させられた皇統の血を引いていらつしやる旧皇族の方々の光籍復帰が最も良い方策です。

そうすれば女性宮家創設しなくても良いです。

宮家により男系による皇位継承が続きます。

もうG H Qはありませんから国民の声で、現在男系男子の皇統の血を引いていらつしやる四つの宮家の「皇籍復帰」叶いますよう、皆様もそれぞれのところで声を発していただきますことをお願い申し上げます。

ありがとうございます。

(鳥取県 山根神社 宮司)

元号を大切にしよう

芦原高穂

昭和生まれの小生にとって、元号と云えばやはり『昭和』がしつくりきますが『平成』の御代となつて、早くも二十九年が経過し、時の過ぎゆく早さに感慨深いものを感じます。終戦の国難に際し、占領軍監視下でも年号制度は改められることなく、戦後の風潮では西暦表記を主張する声も強く聞かれましたが、日本人の矜持として継承されてきました。そして昭和五十四年この制度のしつかりとした法的根拠として、元号法が制定され、明治以来の『一世一元』の伝統は正式な制度になりました。しかし、昭和天皇崩御により、天皇陛下踐祚と同時に改元が行はれ、以後テレビ・ラジオなどの放送関係が西暦を用ゐるやうになり、教育面でも歴史教科書なども西暦表記が多く用ゐられ、西暦が多方面で浸透する現状に、先人が示された歴史ある文化が損なわれて行くのではないかと危惧されるどころです。個々の国民にとって、日々の出来事が積み重なり、それが人の記憶となり、更

に集合し逐年で積み上げられて、やがて歴史となりますが、後年それを思ひ起こすときの鍵となるものが年号であり、それを西暦で共有することと、年号で共有することとは、同胞としての共感といふ面で大きな違ひがあるのではないでしょうか。

元号の最初は、紀元前一三〇年前漢の武帝が即位の翌年『建元』という元号を用いたのが最初と云われ、中華帝国の影響下にあつた周囲の国の多くが、公的に中国年号を大部分がそのまま借用して来たという事実があります。それに対し我が国の元号は日本書紀にも明らかなように幸徳天皇即位元年の『大化』以来、日本独自の元号を制定し、大多数の国民がそれを使い続けてきました。その流れは皇室が政権の中枢にあるか否かに関わらず、歴代天皇によつて発布され、国民はそれを恭しく受け止め、共に歩んできました。つまり日本の元号は、自主独立の象徴とも言へるものであり、歴史的にも一三〇〇年以上の歴史を持つ貴重な文化遺産と言えるのではないのでしょうか。国際社会の流動化が顕著になる中、特に現在の東アジアでの緊張の高まりは、現代の日本人に対し日本人たる意識、いやもつと云えば心意気を糾している一面もあるのではないかと思われるのです。

現状は、次世代に向けて我が国のあり方、枠組みの姿が問はれてゐるといっても過言はなく、ことある毎に元号の伝統を守るため神社本庁を中心に主張してきましたが、近年コ

ンピューターの普及と共に平然と西暦表示を受け入れる神社関係者が現れて、その動きは日増しに広まってゐるのではないかと危惧されます。まして神社本庁包括下の神社のホームページやブログなどの情報発信に於いて、あるいは神社後継者の結婚式などに於いて生年月日に西暦表記が用ゐられ、何ら指摘も成されない有様では、氏子崇敬者をはじめ神社に心を寄せる良識有る一般国民に、神社界は元号を棄てて、西暦表示を受け入れたが如く間違つた印象を与える事になつてゐるのではないか。コンピュータの環境下では西暦でなければならぬとしても、所謂西暦二千年問題の時には西暦表示から年号表示に変へた金融機関もあつたやうに、設定によつて年号表示に出来るのですから。

平成二十七年一月北海道神社庁におきまして終戦七十年を記念し、遙か沖縄の糸満市にあります北海道戦没者慰霊碑である『北霊碑』におきまして、終戦七十周年記念慰霊祭を斎行し、さらに、同地の摩文仁の丘の戦没者慰霊碑を参拝しました。その折り、地元の方の戦没者のお名前を確認するなどしておりましたが、名簿の上に一九四五年とあるのを見て、思わず「なにっ！一九四五年俺が死んだのは昭和二十年だぞ」と言うのではないかと声を上げてしまいました。たまたま付近を歩いていた若いガイド嬢が私の声に反応して、「そうですね、亡くなった方から見たら変ですよ、私も今後御案内するときは、このことを

踏まえて御案内したいと思います。」といつて下さいました。

(北海道 旭川神社 宮司)

北海道神宮の由緒と札幌まつり

吉 良 忠 誠

北海道神宮（札幌神社）は明治天皇の思し召しにより大国魂神、大那牟遲神、少彥名神の三神、通称開拓三神を御祭神として創建され、札幌の都市の形成と北海道開拓事業の伸展と共に発展してきた神社である。

明治二年に神祇官において明治天皇の勅旨により北海道開拓の守護神として開拓三神を奉る「北海道鎮座祭」が行なわれた。これが北海道神宮の創始となっている。そして御霊を開拓判官島義勇が函館から陸路を北上し、途中銭函に仮安置をしつつ札幌に向かい、鎮座地を円山に決定した。その後島義勇は東京に召還されることになるが、翌年明治三年に神祇官の勅祭のもと仮社殿において御霊代の遷座祭が行なわれた。そして明治四年円山にて改めて遷座祭が執り行われ「札幌神社」と社名が決定し、社格は当時国幣小社に列せられたが、翌年には官幣小社、明治の二十六年には官幣中社に、同三十二年には官幣大社に、

僅か約三十年余りで社格国幣小社から官幣大社へと変わっているが、特定の地域名を冠した神社名の神社で官社以下定額に列せられていたそして戦前より札幌市民をはじめとする道民の篤い崇敬により昭和三十九年には「開拓三神」に加えて明治天皇を増祀・鎮祭し、「札幌神社」から「北海道神宮」へと改称され今日に至っている。

その創建の特殊性を挙げるなら当時の政治、外交、軍事、経済などのあらゆる背景を含んだ、北海道開拓の為の創建の意図がみえるところである。例えば、北方のロシアの南下政策に対して早急に蝦夷地の開拓を進めなければならなかったこと。又開拓にあたって精を尽くす入植者の紐帯となる心の拠りが必要とされたこと。このような近代における実情が先に述べた社格の変遷過程などにも現れている。

次に札幌まつりについて触れたいと思う。先般六月十四に宵宮祭、十五に例祭、穂多木神社例祭、御霊代奉遷祭、十六日に発輦、途駐輦、還輦蔡と渡御が行なわれました。この一連の諸祭事を北海道神宮例祭、通称「札幌まつり」と呼び、今回第百三十八回目となる。当時の札幌の街並について言えば円山に鎮まる「札幌神社」へ冬期に参拝することは市街から離れ積雪などにより非常に困難であったことから、明治十一年に市民の寄付により街中に遙拝所設けられ、冬季はそこから市民がお参りをしていた。現在南二条東三丁目所在

の「北海道神宮頓宮」がその創建であり、本社とこの遙拝所を往復するのが渡御の順路の基礎となる。また先に述べた頓宮の完成と共に札幌まつりも行なわれ神輿一基と山車が市内を巡行している。これは北海道開拓の発展を見守ってこられた神の恵みに対して市民が感謝し、御鳳輦を市中にお迎えし街の賑わいを見て頂きたいという願いが札幌まつりの始まりといえる。そうした平安を祈られてきた祭りは、毎年市民の手により渡御が行なわれており、戦時中の二度の中止のみで今日まで受け継がれてきた。

神輿渡御に関わる諸祭事を市民の代表となつて行なうのは祭典を各地区で奉仕する祭典区という組織である。また祭典区の中で各年の中心的な役割を担う区を「年番区」と呼び、年番となつた祭典区は各崇敬団体の浄財を得て市民主催の祭として盛大に行なわれている。

現在三十一の祭典区があります。札幌まつりは札幌の町の発展と崇敬者組織の充実により一層整備がなされていったといえるだろう。

札幌まつりの特色として言えるのは山車の御披露目であろう。山車は本来、神の依代とされている物であるが、山車の舞台で演じられる踊りやお囃子の様子から、また山車本体の華美な装飾から街の「賑わい」というのを表しているのがわかる。

このように札幌まつりの発展は札幌の街の発展と密接な関係にあり、開拓地から都市へと変わる中で、札幌神社から北海道神宮へ、札幌まつりも入植者の様々な地域の祭礼文化を取り入れながら札幌の特色として今日に至っている。

以上のことから北海道神宮の歴史はそのまま北海道開拓の歴史と共に歩んできたわけである。この開拓の地、北海道は二年後には開道百五十年という節目を迎える。そこで御神威をますます発揚させるためにも、我々は神明奉仕に努め、札幌市民をはじめとする道民においても自らの住まいに関する開道の歴史を知る中で今を考え、開拓魂を奮い立たせてこの北海道という近代ならではの、文化、独自性を大切にしなければならない。

（北海道 北海道神宮 権瀬宜）

それは十八番ホームから始まった

河本文夫

どこかに故郷の香りを乗せて入る列車の懐かしさ、カラオケで歌われる方も有るでしょう。そうです、みなさんご存知、井沢八郎さんのヒット曲「ああ上野駅」でございます。昭和二十九年四月五日、青森発上野行き臨時夜行列車。東北の中学を卒業した若い男の子女の子を二十一年間にわたって東京に送り続けた集団就職列車。金の卵と言われ今と違つて情報の乏しかった頃、不安と希望を胸に、まさに人生の第一歩を踏み出したのが、上野十八番ホームでありました。まさに集団就職列車で東京に就職された方々の心の歌それが「ああ上野駅」でございます。

ところが平成十一年九月上野駅十八番線は常磐線特急スーパーひたちの入線を最後に、その長い歴史の幕を閉じることになり多くの集団就職で東京にこられた方々が故郷との糸が断ち切られる感じがしたと寂しく語っておられたようです。

本日のお話は、重い病氣の人たちをお訪ねして希望を与える活動を続けておられる鈴木秀子先生のお話からです。

そのご夫婦はともに東北の出身で、集団就職で上京し下町にある小さな町工場で真っ黒になって働き、同じ東北出身ということからも結婚され、二人にはやがて一人の男の子を授かりました。

しかし、出産後、医師はなかなか赤ちゃんと会わせてくれようとしません。しばらくしてご主人は医師に呼ばれて、こう告げられました。

「落ち着いて聞いてください。お子さんは重い障害を抱えて生まれてきています。おそらくそう長くは生きられないでしょう」

赤ちゃんを見せられたご主人は、きつと言葉を失ったのではないかと思います。それは、頭部が極端に小さい無脳症という先天性の病氣を抱えた子だったのです。

ご主人は鈴木先生のことを知っておられ、

「障害のある子を授かりました。この子がこの世から去る前に、鈴木先生に一度会っていただきたいのです。他に身寄りのない私たち夫婦の願いです」

と連絡してこられました。私はすぐに駆けつけました。そして病院までの道中、両親はさ

ぞかし泣き崩れておられるだろう、どのような言葉をかけて勇気づけてあげようかと、ずっとそのことばかり考え、心の中で神様にお祈りしていました。

私が病室をお訪ねした時、奥様が赤ちゃんを抱き、ベッドの脇でご主人が座っておられました。しかし、驚いたことに、病室の雰囲気はとても明るいです。二人は私の訪問をととても喜んでくれました。そして赤ちゃんに向かって一所懸命笑顔で語りかけていました。

「鈴木先生が来てくださったよ」

「いまあなたを抱えているのがお母さん。横にはちゃんとお父さんもいてくれる。だから安心してちょうだい」

「お父さんも、お母さんもあなたが生まれてきてくれて本当に幸せ。お母さんのお腹の中に十か月も一緒にいてくれたものね。毎日がワクワク、ドキドキだったわ。たくさんの勇気をくれたあなたのことが大好き。何があっても守ってあげるからね」

その病室は、子供が生まれた後、どの親も見せるような笑顔や大きな喜びに溢れていました。身寄りのない東京で厳しい労働に明け暮れ、貧しい生活を強いられている二人は、様々な人生の苦労を味わっていたに違いありません。虐げられたり、嘲られたり、孤独に打ちのめされそうになったり、人に言えない思いをたくさんしてきたに違いありません。

そんな二人にとって、我が子の誕生はただ一つの希望であつたはずですよ。

首を長くして待っていた我が子の誕生。ところが、その我が子は重い障害を背負つて生まれてきた……。

普通であれば精神的などん底に突き落とされたとしても不思議ではありません。しかし、この両親は悲しみに暮れることなく、長くは生きられないであろう我が子に喜びを語り、限らない愛情を注ぎ続けていたのです。

赤ちゃんは神さまからの授かりもの、赤ちゃんは両親を選んで誕生してくるといわれています。魂の成長に必要な両親を自分で選び、この世に生を受けて様々な出来事を体験し、多くの大切な人に出会つて魂を磨き、再び魂の故郷へと帰っていく。ですから、宮参りには、その家族の中で最も魂が成長されているおばあちゃんが赤ちゃんを抱いて参られるのですね。そして、宮詣りの神事が終わりますと、若いお母さんに赤ちゃんを育てながら母として家の主婦として成長してくださいと授けられるんですね。この両親は、魂が永遠であることを確信し、そのような神道的宗教心をお持ちだったようです。

「あなたは、こんなに貧しく学歴も何もない私たちを親として選んでくれたのね。ありがとう。お医者さんからは、あなたは短い命でこの世からすぐに去っていく運命だと聞いて

ているけれども、たとえあなたがこの世から去ったとしても、私たちにとっては大事な大事なことな我が子」

このように二人の口から出てくるのは、深い愛情と溢れるばかりの感謝の言葉です。恨みめいた言葉は一言も聞くことがありませんでした。そして二人は

「あなたには何もしてあげられることがない。だから私たちが一番大切なものをあげましょう」

と言つて、それぞれの名前から一字を取つて赤ちゃんに名前を付けてあげました。そのことで我が子への永遠の愛の証を刻み込もうとされたのです。

私はその場の雰囲気之魂が震え、感動を抑えることができませんでした。

しかし、悲しいことに、この赤ちゃんは五日後に亡くなりました。二人はその後、ついに子宝に恵まれることはありませんでしたが、時々頂くお手紙からも、今は故郷東北に帰えられ、貧しいながらも正直に、清らかに生き抜いておられるようです。

神道の教えは日用にありと申します。なにかを感じていただければ幸いです。

至誠のこころ

村田和之

全身の皮膚が焼けただれ、赤紫に膨れ上がった体で男女の区別も判らず、ただれた皮膚をぶらさげ、「水をくれ、水をくれ」と、つぶやきながらさまよっている人々の姿を未だ忘れることは出来ません。道先を尋ね、行き過ぎた人を振り返って見ると、もう道端に倒れ息絶えて死んでいる姿、数多く道端に倒れている亡がらを集め薪で焼いている光景、地獄があるとしたら、まさしくこれこそが地獄。

世界で初めての経験である、昭和二十年八月六日の原爆は、世界のトップニュースとなるのは当然の成り行きでありました。

私も幼い頃被爆。貴重な体験をした一人であります。実にみにくい恐ろしい体験でありました。これが原爆手帳というものです。年に二回の健康診断が義務付けられています。

そんな人類への原爆投下も七十二年過ぎて、今は忘れ去られようとしています。あのよ

うなものは誰にも投下させてはなりません。

戦後の復興の中で、まだ記憶に残っている暴走族、爆音を鳴らし特攻服に身を包み、旗を掲げ、右八丁、左八丁とパトカーをしり目に我が者顔に走り回っているカミナリ族、私も県下一の犯罪の街と言われている街を、どうにか静かな安心で安全な街にと、十九年間陣頭指揮したボランティア活動もようやく実を結び一昨年の暮、最後の暴走組織団体を解散させるに至りました。

その合い間ようやく広島に明るいニュースが流れて来ました。昨年の前アメリカ大統領の原爆慰霊碑参拝、千羽鶴を自ら折り原爆資料館に残して行かれました。一人私財を投げ打ち、広島の人と同じく米兵捕虜の被爆死した人の掘り起し調査をした、森重昭老人が「被爆した米兵捕虜の魂も一緒だ」とオバマ大統領と涙し抱擁した姿は、世界中の人々の注目を集めたのであります。

しかしまた先月、暗いニュースが日本国中に流れました。

警察署管内に保管していた、八千万円余りのお金が盗まれてしまいました。

未だ解決していませんが、一番安心であるべき警察署内で事件が発生するとは、遂に日本は落ちる処まで落ち込んでしまいました。

こうした世相は、今の若人の中に表われています。日本の未来への希望が持てない若人が三八・四パーセントだとか。世界で一番多い率と言われています。戦争問題や貧困問題、天災に犯罪、今まさに日本をはじめ世界中が荒廃しているのです。

たった一度の人生、如何に生きるべきか。私達の頭の中にある脳細胞は約百四十億あり、二十才頃がピークで、一日に十万個もの細胞が死滅していくそうです。現に生きている我々の脳細胞の中で、使われているのは数パーセントに過ぎません。失われても新しく生まれて来て、自然と不要細胞は消えてしまうそうです。加齢により全体数が減るそうですが、努力次第で減る数を少なく出来るようです。

要するに脳のトレーニングによる活性化が必要なのであります。私の経験から申しますと、年をとつてもまだまだ自分には出来る仕事があると思つて様々な事をする事が大切です。

身体の疲れは脳の疲れ、放置すると脳へのダメージも生じます。記憶力は四十才の頃より衰えて来ます。人とのコミュニケーションも必要です。いつの時も脳を育て活性化させることが必要です。

たった一度の命、人生の一生、持てる力を全て出し切り悔いのない一生を送りたいもの

です。

「問われたこと、答えたこと」の中に

子供を叱るな来た道じゃ

年寄り笑うな往く道じゃ

来た道、往く道、ひとり道

みんな来た道、行く道じゃ

これから通る、今の道

今やらねば、いつ出来る

わしがやらねば、誰がやる

とあります。

私も生まれてから今日の日までいく度かの、死線を乗り越えて来ました。

幼いあの日、原爆で祖父母をはじめとする親族と、今は名前すら思い出すことの出来ない友人や知人を亡くしました。しかし、幸いにも両親と姉妹は欠けることがありませんでした。目の前に居た人々は全て死ぬという経験をし、全身に大やけどを負い死線をさまよった私の父は、これより先は頂いた命と、全身全霊を賭して地域の復興奉仕にと神職として

身を捧げ一生を終えました。それは私自身の道標でもありました。

原爆を乗り越えたのも束の間、小学生になって重い病で明日をもないと言われた私を守り導いてくれたのも父母であり神様でありました。明日には息子の葬式の準備をしなければならぬと諦めかけたその時、父は神様から一つのお告げを聞いたのだそうです。

「この子は殺す訳にはいかないのだと。家の為だけではなく、日本の国の為に必要なのだと」

その言葉通り、私は今の年まで生き延び、何とか世の中のために働こうと自分なりに努力をしているつもりです。弱い弱い体だったからこそ、生きている限り、生かされている限り精一杯やろうと思う心が強かったかもしれません。今思うに、この子とは私に限定されるのではなく、すべての親にとって子どもは宝です。殺させる訳にはいかないのです。そして、日本の国に生まれたならば、日本の国を通して世の中の役に立つのです。そう、全ての人がです。

死にかけては蘇りという貴重な体験を人よりは多く身に受け、数多くの困難を超えてみて、今感じる事は、この身体は神の計らいにより生かされているのだということです。

生かされているのであれば悔いのない一生を、「至誠の心」を持って取り組むことが大

切であると思うのです。

今、大和魂を忘れ去ろうとしている日本、危機存亡の時です。

この北海道も、太政官布告により告示されて百六十年を迎えます。吉田松陰の言葉に「至誠にして動かざるものは未だ、これあらざるなり」。人は、真心を持つてすれば、どんなものでも感動しないものは無いと、小田村伊之助にあてた言葉です。

私達は歌を忘れたカナリアであつてはならないのです。今年は、皇紀二六七七年、世界で一番長い万世一系の天皇陛下を中心とした民族、文化伝統を誇る日本、私達はその使命を知り、成すべき道をしっかりと見据え打ち進んで生きようではありませんか。

(広島県 長束神社 宮司)

これが「道」でしょう

山 本 行 恭

神道について参拝者にお話をするとき、まず御祭神の由緒や御神徳、ご鎮座などの歴史。現在の崇敬者感覚などと、一種在り来りな説明をすることが多い中でフト氣づかされたことがあります。今夜神社主催のみそぎ会。

参加者は一般の社会人や主婦、経営者もいますが、特殊な宗教に属した人や運営している人はいません。だからこそ神道の話に興味を持って下さるんです。

『神道は言挙げせず』との教えがありました。しかしその言葉自体の時代背景を見ると、悠久の長い歴史事実と共に、我が大和民族の歩んできた事実には、ボンと膝を打つように、正にその通りだ。今更兔や角と能書きをたれなくても良いのだ。長い年月に自然と培われた大和の精神が今に伝わっているので間違いない。と一蹴された時代だったと思うのです。

しかし、戦後七十二年も過ぎれば世代や時代は大きく変わってきました。戦中戦後の厳

しい教育で叩き上げの教育をうけられた大先達、その方々の家庭環境や生活の風習、師弟関係や学校での師に対する関係はどうだったか。その全てが精神的柱になって、その後の日本を大きく、力強く舵をとって下さっていました。既に漫画が現実になった時代が人間性を徐々に変えつつあるように思います。従いまして、今私たちは堂々と言挙げて、知らない人に教えてあげないといけない時が来ているのです。

神道は「最高の常識」を当たり前のように実行することなのです。それは、朝は希望に燃えて起き、挨拶をする。まずご先祖や神様・仏様にお供えをして一日の安泰と家族の健康、更に個々の願いが叶うように祈り、手を合わす。昼は自らの努力によって仕事をする屋外に出れば家と同じようにゴミを拾って綺麗にすることを心得て、更には他人との会話も同時に必要とされます。今、発達障害とかADHDなど、訳のわからない病氣めいたのが流行っています。全部に原因があるとは言いません。つまり、家庭環境が人を育み大きくするわけです。そこには親も兄弟姉妹に祖父母の教えも加えられていながらに育てていけば、会社や学校でのコミュニケーションや挨拶も極々簡単に自然と出来るわけでしょう。又、夜はその一日を振り返り感謝があれば反省もある。それが普通の生活様式でしようね。

神職だから声高にいうのはありません。

神棚への手合わせや祝詞を言わなくても構わない。何か折あるとき、例えば大きな願いを叶えたいとき又、一日を振り返って何かの拍子によって難を免れた時など、守って頂いたのだと感じたら、感謝で手を合わす。それが尊いのです。高速道路で対向車が飛んでくる事もあったのですから。運転手が常識の判断で咄嗟に行動したから難がなかったのです。たね。朝起きて洗面して、食事はろくに摂らなくても化粧だけはしつかりする。狭い車内に詰め込まれて汗まみれに。それだけで疲れたりするのに、仕事に追われ逃げるようにして気晴らしに行く。家族間で話すこともなく、個の時間を求めて独りになり無駄な時間を費やすようなことはありませんか？去年の今頃はポケモンGO！がブームでしたから、部屋に籠ってパソコンやGOでの外出。それが常識みたいにとられていました。

このような生活習慣が毎日の繰り返しとなっていては何気ない中に、常識という通念の中にもっと大事な通念が含まれているのに気づくことがあると思います。

神道という常識は、ああしろ、こうしろとの命令は一切ありません。それを教える方法も教科書もない。それが神道なのです。だがら誰にでも気づいて感じる事ができるわけです。少々受け止め方に違いはあっても。

こんな生活を皆がしている訳ではありませんが、人の目を気にしないで真剣に素晴らし
い出来事があったことに触れましたので紹介します。それは新聞に寄せられた一コマであ
りました。

『昨年十二月二十一日の夕方。埼玉県行田市の県立高校一年の女子生徒が、県道に散乱
していた古紙を一人で回収していた。見て見ぬふりをして通り過ぎる自分を受け入れられ
ず、後先のことを考えずに一心不乱に集めたのです。自転車通学の少女は鴻巣市の県道を
通りかかった時、新聞紙や折り込みチラシが半径約三メートルにかけて大量に散乱してい
るのを目のあたりにした。一度はそのまま取り過ぎたものの、何もしていない自分に辛
くなったと戻ってきた。当初は古紙を自転車の前カゴに積んで自宅に持ち帰ろうとした
が、収まりきれない。約五百メートル離れたコンビニへ行き、ゴミ袋を買って戻り、再び
拾い集めた。現場は交通量の激しい通り。

少女は青信号になるたびにひたすら拾い続けた。午後五時二十分頃、同署に女子高生が、
落とした荷物を一人で拾っている。可哀そうだから助けて欲しいと連絡が入った。署員
が駆けつけると、すでにゴミ袋三袋、計十キロの古紙が回収されていた。持ち帰り方法を
考えていた矢先に署員が到着。安心した少女の目からは涙が流れた。高校ではバスケ部に

所屬の少女。学校周辺のゴミ拾いなど美化活動をしてから朝の練習に取り組んでおり、学校でもやっているのが当たり前と思って拾いました」と振り返った。署長から感謝状を贈られ、少女は、周りの事をもっと見られる一年にしたいです。」と微笑んだ。これは一月四日に記載された記事です。』

こんな何気ない日常を思い返せば、誰にでもできることが妙に人目を氣にしたりして通り過ぎてしまうことはありませんか？一人ひとりが少しでも明るく爽やかで綺麗な生活環境にしようと心がけ、実行することが神道 という教義の中に潜んでいるのです。

あらゆる宗教の持っている概念は、それぞれの必要性と仕来りに従っていますが、神道にはそれがありません。それはつまり、神道は宗教性を帯びてはいますが、我が国独自の自然発生した民族的な信仰や尊崇が主となっているからです。それぞれのご先祖に対して、今あることへの有り難さを、お墓や祖霊舎という場所で、平生の感謝を捧げるだけなのです。古来より日本人は日の出に起き、日中は太陽の下で土と共に働き、夜は農機具修理や夜なべの仕事をして一日を終えました。朝の太陽と夕日に向かって手を合わせ拍手を打ち折りを捧げていた姿に感動したイギリス人、ラフカディオ・ハーンは、そんな真摯な人間性に心を打たれ、小泉節子さんと結婚して小泉八雲と名乗り小説家になったのです。異教・

異郷の人の心までも揺り動かすほどの、強烈な力と影響力を持っている。これも全て、道^{ミチ}の持つ意味です。道は、人間に与えられた、思考と行動の条理です。万古不変・不滅の道人間として宗教に偏ることもない、誰でもが普段道りにする行動をいうのです。

先の高校生の行いこそ正に、当たり前前の行為ですが、その行いに胸を打たれるのが人間の性なのでしょう。難しく考えないでごく当たり前の生活をする。その中には自然に道^{ミチ}という流れに従って生きてゆく私たちがいるのです。

(三重県 椿大神社 宮司)

先祖の祭　―日本人の死生観

落合 偉洲

一、仏教の伝来

五三七年　「元興寺迦藍縁起並流起資財帳」

「上宮聖德法王帝説」

五五二年　欽明天皇冬十月百濟の聖明王

二、神道の葬式

通夜祭、遷霊祭、葬場祭、火葬祭（埋葬祭）帰家祭、十日祭、五十日祭、忌明け、死体を離れた御霊は五十日間、空中をさま迷い、いつか必ずこの世に戻ろうとしている。「草葉の陰から」自分の戻る場所を探している。状態。この時間は土葬された遺体が肉体が腐食して白骨化する期間であるともいわれている。

死靈が遺体から完全に離れるまで、家族は喪に服さなければならない。ここまでが葬儀、以後は祖霊祭となる。

三、仏教の葬式

人は死んだら中有の世界をさ迷う。まず冥土への途中にある三途の川を渡る。罪なき者はその川の橋を渡る。罪の軽い者は浅瀬を歩き渡る。罪深い者は深みを歩き歩き渡る。川幅は五百キロ。川を渡った所に脱衣姿と脱衣翁がいて罪の重さを量る。以下七人の大王の審判を受ける。夫々七日ずつ、初七日（しよなか）の追善の法要をすると少し罪が軽くなり、三十七日（さんしちにち）の法要（二十一日）全部終わった四十九日（しじゅうくにち）法要をすると罪が軽くなる。この四十九日間を仏教では、中陰とか忌中とかいう。忌中が終わる四十九日を満中陰という。中有の世界が終りその後いよいよ冥土への入口となる。六つの入口がある。六道輪廻。衆生が生前の善悪の業により死後に赴く六つの迷界。天界。人間界。阿修羅界。畜生界。餓鬼。地獄。六道輪廻を超えて極楽浄土に行ける人は、仏道の修行を積み悟りの道を開いた者のみが行ける。

天界は幸せ一杯の世界であるが、ただ一つだけ死ぬという苦しみのある世界。修羅界は

阿修羅の住む争いの絶えない世界。餓鬼はやせ細って喉が針の孔のように細く、つねに餓えや渴きに苦しむ世界。地獄は現世に悪業をなした者がその報いとして死後に苦果を受ける所。閻魔大王が主宰し、鬼類が罪人を呵責するという八大地獄、八寒地獄など多くの種類があるという。

六観音の信仰（京都市上京区・大報恩寺）

六地藏（地藏も六道を廻り救済にあたる・地獄におちて責め苦を受けていても、生前の些細であつても地藏信仰によつて、地獄から救つてくれたり、身代わり（みがわり）になつてくれるという信仰）六道にさ迷う人々を観音が救うという浄土教の信仰。十世紀以降盛んになる。真言宗小野流の祖、仁海（じんかい）によると、地獄道…聖（しょう）観音餓鬼道…先手観音（十一面観音、不空罽索（ふくうけんじゃく）観音の次に出現。手や目をたくさん持つており、観音諸尊の中で救済能力ナンバーワンという。

畜生道……馬頭観音

阿修羅道……十一面観音

人道……准てい（じゅんてい）観音天台宗では不空罽索観音

天道……………如意輪観音

四、喪中

明治七年十月十七日太政官布告第百八号 服忌令武家の制を用ひ、京家の制廃止の件父母の死亡の場合喪（忌）は五十日 義父母、祖父母の死亡の場合喪（忌）は三十日、夫の死亡の場合喪（忌）は三十日、妻、嫡子の場合喪（忌）は二十日。右期間以上経過しての「喪中につき新年のご挨拶を……」は意味不明となる。当然、神社参拝の可である。

五、仏式の供養

祥月命日（死亡月日）に僧侶を招き読経、飲食。一年目の供養……一周忌 満二年目を三年忌、その後七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、二十七年忌、三十三年忌、四十九年忌で「弔いあげ」「訪い切り」。神道では五十年後で「まつり仕舞」。ここで死霊は個性を失い、先祖の御霊は神、仏になってご先祖さまになっていく。この後個人位牌や霊璽を川に流したり、焼き捨てたり、墓に収めたりする習慣が各地にある。

六、盆

旧暦七月十三日から十五日乃至十六日にかけて先祖の霊を家に迎え、供物を供えて供養する。行事。三種類の先祖の霊。本仏（ほんぶつ）・祖霊・新仏（あらぼとけ）新精霊・無縁仏（むえんぼとけ）・餓鬼。本仏は、年忌を重ねた先祖の霊で仏壇に迎えず座敷とか縁側に別の祭壇を設けて祀る。無縁仏も本仏や新仏について来ることもあり、ときどき悪しきとり憑きをするので、これも家に入れず庭に餓鬼棚を設けてもてなす。

盆踊り……本来盆に訪れる精霊を慰める踊り。成仏できない餓鬼仏を供養する意が強い。ゆるやかな太鼓などの音に合わせて静々と踊るのが本来。富山県八尾市の風の盆など。

七、キリスト教の伝来

天文十八年（一五四九年）七月ザビエルが鹿児島にキリスト教を伝える。キリスト教とは大工ヨセフの子（ナザレの）イエスういキリスト（救世主）と信ずる宗教、創造主（ゴッドと被造物）西暦イエス・キリストが誕生したとされる年を紀元元年とする。（紀元前

Before Christ） 紀元後 Anno Domini）

天正十五年一五八七年 豊臣秀吉、パテレン追放令終末論カトリック 天国・煉獄・地獄プロテスタント中有？から天国・地獄、キリスト教圏では、死霊は右の通りにき、死体をただちに物体化するのので、葬式や埋葬の形式にこだわりがさほど強くない。死ぬ直前にキリスト教に改宗する人・天国泥棒。

八、鈴屋答問録

又問。人死ぬれば黄泉國へゆくと云は、佛道の地獄にゆくによれるに似たり。又、魂氣天に上るとみれば、面白けれども黄泉國へゆくと云に合わず。此こといかが。答。人死ぬれば、善人も悪人もよみの國へゆく外なし。然るを佛道の地獄の説に似たりとて疑ふは、いかが。たとひ地獄と全く同じ趣なりとも、それにさはることなし。神代の古傳、何ぞ後世の佛道にはばからむや。そのうへ佛道の意は悪人は地獄、善人は天上淨土に生るといふ、これ吾道と大に異也。彼は方便の作り言なるゆゑに、善悪当然の理を考てかまへたる作り言なる故に、面白くはきこゆれども、そは作り言なれば、いかようにも面白くは云はるることなり。

九、安心（あんじん）の事

安心とは弥陀の救いを信じて、一心に極楽往生を願う心。宗派の救法の根本眼目をいう。安心をたて候は、皆外國の儒佛などのさかしらごとにて、畢異は無益に空論に候。凡てさやうのことは、みな寛は人の智を以てはかり知べきことにあらず候へば、色々にまをすも皆おしはかりのみに候。御國の上古の人はさやうの無益の空論に心を勞し候ことは、つゆばかりもなく候ひし也。然るに、外國よりさまざまの書どもわたり参りて、それを学び候世になりてより、……。此世に死する程悲しきことは候はぬ也。然るに、儒や佛はさきばかり至りてかなしきことを、かなしむまじきことのやうに、色々と理屈をまをすは、真理の道にあらざること、明らけく候也。神道の安心は、人死候へば善人も悪人もおしなべて皆よみの國にゆくことに候。

十、ラフガディオ・ハーンの觀察

「神国日本解明への試論」平凡社東洋文庫

死者を、その死後でも相変わらず一家の生活の一部になっていると考え、また死者の方でもその子供や縁者の愛情を求めていると考えている日本の家庭の礼拝ほど、誠実な宗教

はどこにもないしまたこれほどいじらしい信仰はどここの国にも見られない次第を銘記しておかなければならない。 — 中略 —

姿こそ見えないが、死者は、その一家を守り、その中にいる人たちが幸福であるように見守り、夜になれば灯明の炎の中をひらひらと舞う。そして炎がゆらめくのは死者の動きなのである。たいがい死者は位牌の中に住居している。 — 時によつては、この位牌が生きたものになる。つまりそれを五体具現の人間の实体に変えるそしてその姿が生きているものを助けたり慰撫したりするために、活動の生活に戻るのである。彼ら死者はその祭られてゐる場所から一家に起こるすべてをじつと目で見、耳できいている。彼らは家族とともに悦び、共に悲しんでいる。彼らは家人の声をきいて喜び、家人の生活の暖かみを感じては喜んでゐる。彼らは愛情を求める、しかしその食物から立ち上がる精気だけでもけっこう満足なのである。ただ日々の勤行をきちんとはたしてもらうことでは厳格なのである。彼らは生命の授与者であり、富有の授与者でもあり今日という現在を作ってくれた上にその指導者になつてゐる。

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	参事	参事	副会長	副会長	会長
佐々木美津子	木下久榮	河本文夫	鍵三夫	小野日隆	井出舜	生寫經和	荒木眞幸	芦原高穂	佐古一洌	村田和之	戸内康雅	山本行恭	落合偉洲	
天照御祖神社	大江八幡宮	宮尾八幡宮	志波彦神社鹽竈神社	八坂社	諏訪神社	松尾大社	月山神社	旭川神社	松尾大社	長束神社	心清水八幡神社	椿大神社	久能山東照宮	
宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	名譽宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司

